

平成 28 年度 学位論文

倭古印の作風分析と書道教育についての考察

奈良教育大学 教育学研究科

教科教育専攻 美術教育（書道）専修

153605 野原 清香

目次
倭古印の作風分析と書道教育についての考察

はじめに	2
第1章 倭古印の概要	
第1節 日本上代の印章	3
第2節 律令下の印制と官印について	4
第3節 公印・私印について	11
第4節 倭古印の集譜について	22
第2章 倭古印の分析	
第1節 「天皇御璽」の変遷	23
第2節 天平年間制作の官印からみる字体特徴	32
第3節 諸国印の比較からみる字体変遷	38
第4節 倭古印と隋唐印の比較	43
第3章 近現代篆刻家・金工家による倭古印体を用いた篆刻での表現方法	46
第4章 倭古印の教育的価値	51
おわりに	55
注	56
図版参照ページ	59
参考文献	61

はじめに

私が倭古印の存在を知ったのは大学四回生の時である。『書道講座⑥篆刻』を開いて眺めていた時に、倭古印の印影が載っているページが目に入った。それまで中国清代篆刻家の緻密で均整な作品を好んで学習してきた私にとって、日本独特の仮名にも通ずるような柔らかさを持った倭古印の風趣は衝撃的で、興味深いものであった。そして倭古印の印譜を探して鑑賞することで、印によって寸法や字形が大きく異なることに気付いた。その後倭古印風の作品制作にも取り組んだが、ただ字形を真似て刻しただけでは倭古印の風趣を出すことはできなかった。理由としては作風分析がしっかりとできていないことと、倭古印が作られた背景や鑄造方法などの知識が不足していることがあると考えている。そのため倭古印を創作に生かすことを最終目標として、詳しく研究することにした。

倭古印は「官印」「公印」「私印」の3種に分けられ、その性質や時代によって作風が大きく異なる。中でも官印は大宝律令に基づいて寸法や用途などが細かく規定されており、権威の象徴となっていた。それに準じて公印が作られ、次第に私印も現れていく。よって第1章では倭古印の概要として、倭古印が作製された背景や印の特徴などを述べる。権威の象徴であった官印は、作風もより洗練されたものが多いように感じる。よって第2章では倭古印の分析として、主に官印に焦点を当て、作風の特徴や変遷について分析することとする。さらに第3章では、篆刻での表現方法として、自分の創作活動への糸口を見つけ出すために、日本の近現代篆刻家・金工家の作品から倭古印の風趣を取り入れたものについて考察する。

また、この研究を通して高等学校書道における篆刻学習についても視点を向きたい。現在高等学校での書道教育では、篆刻に充てる時間が短いように感じている。それは教科書の篆刻を扱うページ数が平均すると3ページ程度であることから読み取れる。しかも中国の篆刻に焦点が当てられたものばかりであり、日本は近現代の作品が載せられる傾向にある。さらに倭古印は教科書に載せられてもいない場合がある。私は日本の高等学校での書道学習なのに、自国の篆刻作品がほとんど扱われていないことに疑問を感じている。そこで現状把握のために、現行の教科書の篆刻学習のページを見比べ、篆刻学習における倭古印の位置付けを探る。そして倭古印を高等学校の書道教育で扱う時の利点や問題点を考え、指導方法を考察していく。

第1章 倭古印の概要

第1節 日本上代の印章

我が国において印章がいつのころから使用されたかについてはほとんど資料がなく、明らかにすることができていない。現在、我が国に伝存している印章で最も古いものは「漢委奴国王」印（図1）である。ただしこれは日本で作られたものではない。この印は天明4年（1784）2月23日、福岡県博多の志賀島において巨石の下から土地の農民によって発見されたものである。金印蛇鈕、白文方印の体をなしている。



「漢委奴国王」印影
後漢（57年）



原印（原寸）
（図1）



鈕（縮小）

これについてはすでに発見当初から、『後漢書』¹に、「光武帝の中元2年、倭奴国の使者が奉賀朝貢して印綬を賜った」とある記載に一致するものとされている。後漢の中元2年は、我が国では弥生時代に当たる。この印は中国でまだ紙が発明される以前²のものであるから、木牘³や竹簡⁴の封泥⁵におすために作られたのであって、陰刻⁶になっており、しかも刻みが深くなっている。

そののち、三国魏の明帝の景初3年（239）、わが神功皇后39年、倭の邪馬台国の女王卑弥呼が魏の国へ使を遣わし、魏帝より「親魏倭王」の称号を受けて、金印紫綬を賜ったことが『魏志倭人伝』⁷に見えているが、この印はまだ発見されていない。しかし、このことは「漢委奴国王」印とともに、弥生時代に大陸の印章が我が国に渡来していた事実を証明するものである。ただ、このころ日本の文字がどのようなものであったかはなお不明であり、以上のような資料だけでは、我が国において印章が作られ、また実際に用いられたかどうかということについてはなおよく分からない。

記録に見えるところで、官印⁸に関する確実な最初の記事は、持統天皇六年（692）9月丙午（14日）の『日本書紀』⁹である。

神祇官奏上神宝書四卷，鑰九箇，木印一箇，
神祇官奏して神宝書四卷，鑰九箇，木印一箇を上る。

とあり、この「木印」を古訓では「きのおしで」と呼んでいる。「おしで」は「押手」の漢字が一般にあてられるようである。「おしで」とは、元来掌に朱肉などをつけてべったりと

おしたものである。日本には古来、文書などの証として押手をする習慣があったところ、印章の制が大陸から入ってきたので、この印の訓としてそれまで我が国で印章の機能を果たしていた押手という言葉が、これにあてて用いたものと考えられる。しかしこの木印は発見されていない。

古墳文化の時代から奈良時代も含めて全国的にまだ古墳からは古印の出土の事例がないことは、印章の使用が広く社会になかったものと考えられる。

文武天皇の大宝元年（701）に制定されて、翌年施行された大宝令¹⁰の公式令¹¹に官印に関する規定があり、これによって律令に基づいてはじめて官印が施行されることになったのである。規定に基づいて奈良時代から平安時代に襲用された印章を一般に倭古印と呼んでいるのである。

第2節 律令下の印制と官印について

大宝令の公式令に基づき、慶雲元年（704）には諸国の印が鑄造されている。大宝令を修正した養老令¹²にも印に関する規定がある。現存する令である養老令の公式令、天子神璽条を以下に載せる。

天子神璽謂、踐祚之日寿璽、寶而不用、内印、方三寸、五位以上位記、及下諸国公文則印。外印、方二寸半、六位以下位記、及太政官文案則印。諸司印、方二寸二分、上官公文及案、移牒則印。諸国印、方二寸、上京公文及案、調物則印。

天子の神璽謂う、踐祚之日の^{よごとのしろし}寿璽、寶として用いず、内印、方三寸、五位以上の位記、及び諸国に下す公文則ち印せ。外印、方二寸半、六位以下の位記、及び太政官の文案則ち印せ。諸司印、方二寸二分、官に上る公文及び案、移・牒則ち印せ。諸国印、方二寸、京に上る公文及び案、調物則ち印せ。

ここでは内印、外印、諸司印、諸国印の4種に関する規定がされている。ここでいう内とは天皇のことであり、外とは政府のことである。よって天皇の印を内印、中央政府の印を外印と称している。以下、四種を印制下の官印として説明する。

（1）内印

始めに、内印の規定についてみていく。内印の寸法について、天子神璽条では「方三寸」と規定がある。これは当時の唐尺が基準であるため、現在の日本の寸法では約2寸8分5厘であり、メートルで換算すると約8.7センチとなる。令制印の中で「方三寸」という最大の寸法を規定したことについて、荻野三七彦氏が『印章』の56ページ8行目より、「天皇制国家の権威を示すものであって、令制では大宝令の規定に際して一応やはり印の制度を天皇の大権の1つであると考えて」と述べている。よって天皇制国家の権威の象徴として8.7センチにもなる非常に大きな印を用いたと考えられる。

印の用途については天子神璽条で「五位以上位記，及下諸国公文則印（五位以上の位記，及び諸国に下す公文則ち印せ）」とある。よって五位以上の位に叙するときの位記および諸国に下す公文に用いられていたと考えられる。公式令の位記式によると、「五位以上を勅授，六位以下，外七位・内八位以上を奏授とし，外八位及び内外初位を判授」としている。ここから内印は勅授の場合に用いられていたことがわかる。また当時所用の公文書のうち，所管の官司から被管の官司に下す書式を「符」といい，太政官ないし八省から諸国に下す符には内印を捺す定めであったとされている。

押印の状況について，石井良助氏の『はん』の21ページ13行目に「これをおすには，天皇出御の上，勅裁を受けて，御前でおしたものであり，この手続を請うことを「請印」といった。」とあり，ここから内印が重要なものであったことがわかる。

公式令には印について，使用上の根本的なことが示されている。

凡行公文皆印事状・物数・及年月日，并署，縫処，鈴伝符尅数

凡そ公文を行ひなば皆事状，物数，及び年月日，并て署，縫めの処，鈴伝ひて符の尅の数に印せよ。

とあり，公文書について印の押し方を示している。ここには，文書の文面に記された事の状，物数，文書を発行したその年月日，文書の発行を直接担当した官吏の署名，紙の継ぎ目のところ，駅鈴伝符¹³の時刻を記したところなどにすべて捺印せよと記載されている。これは朱印を一面におすことによって天皇の権威を示したとともに，文書を保証し，紛失・改竄を防止したと考えられている。

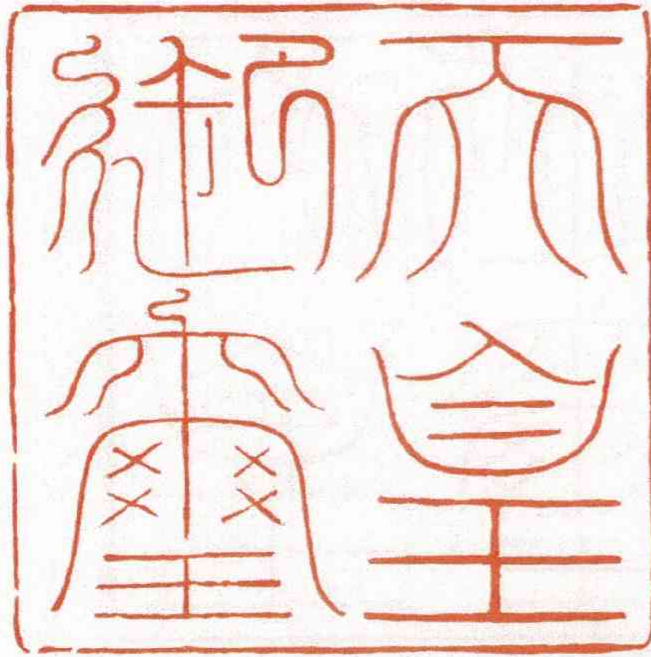
令では印文や印材の規定がない。しかし印影をみると，印文は篆書で「天皇御璽」の4字が2行に陽刻¹⁴されていることがわかる。印材については大宝令そのものではないが『延喜式』¹⁵巻17，内匠寮式に，印についての製作の資材のことが詳細に記してある。

内印一面料，熟銅大一斤八両，百 大三両，藤大三両，調布二尺，炭三斗，和炭二斗，長功七人（取藤様工二人，鑄二人，磨三人，）中功八人小半，短功九人大半，
内印一面の料，熟銅は大一斤八両，百 は大三両，藤は大三両，調布は二尺，炭は三斗，和炭は二斗，長功は七人（取藤様工に二人，鑄に二人，磨に三人，）中功は八人小半，短功は九人大半，

とある。これによって内印が鑄造した銅印であることがわかる。また内匠寮が内印その他の官印の鑄造を専ら担当したことも知ることができる。なお，この内匠寮は大宝令の官制には存在しなかったものであり，神亀5年（728）に増設されたものである。

内印は印影が伝来しているのみであり，印章の外形，鈕¹⁶，印綬¹⁷などについては不明である。今日，内印の印影のある最古の文章は，天平感宝元年（749）の『聖武天皇施

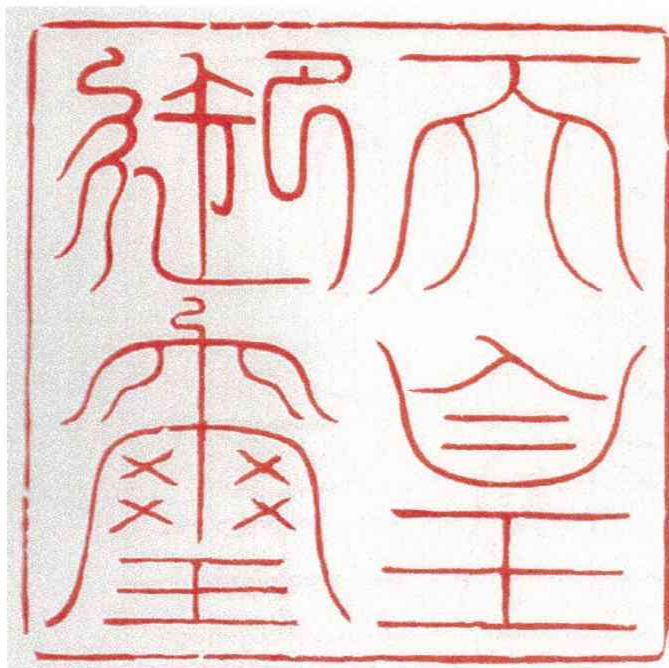
入願文』(平田寺勅書)(図2)である。これに続くものは、天平勝宝八歳(756)の『東大寺献物帳』及び『法隆寺献物帳』(図3)である。天平勝宝8歳7月8日の法隆寺献物帳によれば、文書の全面にわたり3段6行計18個の内印が押捺されている。私は恐らくこの2種の「天皇御璽」印影は、復元を見る限り酷似しているが別のものであるのではないかと考えた。印影比較に関しては、第2章第1節で行うこととする。



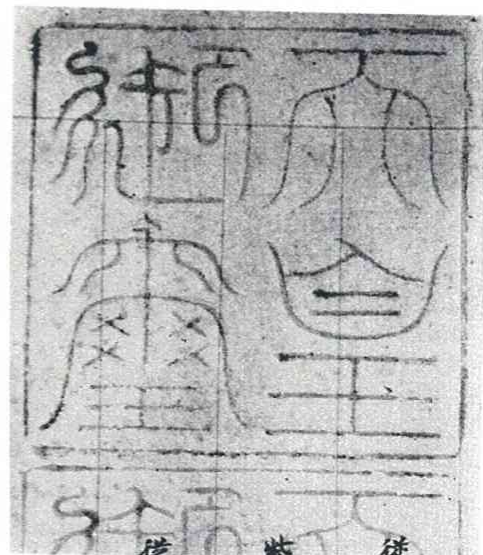
「天皇御璽」 天平感宝元年(原寸)



『聖武天皇施入願文』押印箇所
(縮小) (図2)



「天皇御璽」 天平勝宝8歳(原寸)



『法隆寺献物帳』押印箇所(縮小)
(図3)

(2) 外印

次に外印について、公式令の天子神璽条では「外印，方二寸半，六位以下記，及太政官文案則印。(外印，方二寸半，六位以下の位記，及び太政官の文案則ち印せ。)」とある。ここから外印の寸法は「方二寸半」であることがわかり，およそ7.3センチである。また，六位以下の位記および太政官の文案に押すべきものとされた。外印の印文が篆書で「太政官印」の4字を2行で陽刻しているところから，外印は太政官の印であったことがわかる。

印材については内印でも述べたように、『延喜式』内匠寮式に記載がある。

外印一面料，熟銅大一斤，白 大二両，藤大二両，調布二尺，炭二斗，和炭二斗，長功七人，(藤工二人，鑄二人，磨三人) 中功八人小半，短功九人大半，
外印一面の料，熟銅は大一斤，白 は大二両，藤は大二両，調布は二尺，炭は二斗，和炭は二斗，長功は七人(藤工に二人，鑄に二人，磨に三人)，中功は八人小半，短功は九人大半，

とあり、内印と同じく鑄造印であったことを示している。

外印は太政官から発する公文書に押すものであるが，太政官印について詳しいことは判明していない。故に太政官庁内で外印がどのような職掌によって取り扱われ，保管されていたものであるかは不明である。

太政官の出す文書には「符」「牒」「奏」の3種類があり，それぞれ「太政官符」「太政官牒」「太政官奏」などと称された。「太政官符」とは，所管である太政官から被管である八省や大宰府，国々の国司に下された文書であり，重大な特殊の事項を取り扱った太政官符には内印が押されたが，一般に外印を押したと考えられる。内印の項で符は「太政官ないし八省から諸国に下す符には内印を捺す定めである」ことに触れた。内印請印について、『続日本紀』の和銅5年(712)5月28日に，

丙申。太政官処分。凡位記印者，請於太政官，下諸国符印者申於弁官。

丙申。太政官処分す。凡そ位記の印は，太政官に請け，諸国に下す符の印は弁官に申せ。

とあり，請印の折にはまず太政官が請けることが記載されている。しかし，養老4年(720)5月21日の太政官奏には、『続日本紀』によると，

癸酉。太政官奏。諸司下国小事之類，以白紙行下。於理不穩。更請内印，恐煩聖聽。望請，自今以後，文武百官下諸国符，自非大事，差逃走衛士，仕丁替，及催年料廻殘物，并兵衛采女養物等類事，便以太政官印之印。

癸酉。太政官奏す。諸司国に下す小事の類，白紙を以て行下す。理に於いて穩やかな

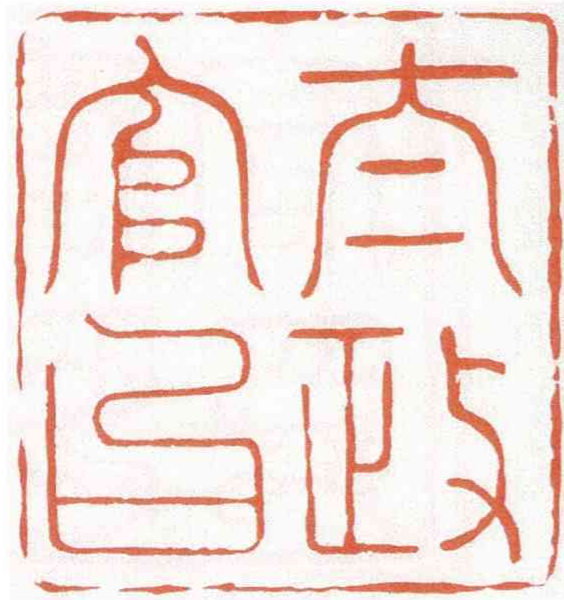
らず。更に内印を請わば、恐らく聖聴を煩わさん。望み請うらくは、今より以後、文武百官諸国に下す符は、大事に非らざるにより、逃走の衛士、仕丁の替を差び、及び年料を催し残物を廻し、并に兵衛・采女の養物等に類する事は、便ち太政官印を以て之を印せ。

とあり、諸事に内印を請印することは天子の手を煩わせることであるため、諸国に下す符の大事でないものは太政官印を用いることとなった。

「太政官牒」とは、公式令にて牒が官司から官司に準ずるところ（僧綱所など）や、官司でないところ（大寺・大社など）に出す文書の名称を指すとあるため、太政官から僧綱所や大寺などに出された文書であったとされる。

「太政官奏」は太政官から奏上して天皇の勅裁を仰ぐための文書である。公式令には論奏式・奏事式・便奏式の3様式の規定があるが、太政官印の捺印の有無について記載がなく、実物も伝わっていないことから、この文書には外印をおさないものであったと考えられている。

太政官印の印影のある文書について、初見は和銅2年（709）であり、大宝令の公式令により、ただちに初鑄されたものであると考えられている。以下の図版はその後に作られた、延暦2年（783）太政官牒に捺されたもの（図4）である。



「太政官印」延暦2年（原寸）



『太政官牒』押印箇所（部分縮小）

（図4）

(3) 諸司印

諸司印について、公式令では「方二寸二分，上官公文及案，移牒則印。(諸司印，方二寸二分，官に上る公文及び案，移・牒則ち印せ。)」とある。ここから寸法が二寸二分，およそ6.6センチであることがわかる。また政府各省，諸部局の印をいい，八省・彈正台及びその管下である寮・司などの印を称する。官に上る公文書及びその案，移，牒などの文書に用いられた。印の材料については，内印や外印と同じく，『延喜式』に，

諸司印一面料，熟銅大十四両，白 大一両二分，藤大一両二分，調布二尺，炭二斗，和炭二斗，長功六人（藤工二人，鑄二人，磨二人），中功七人小半，短功八人大半，
諸司印一面の料，熟銅は大十四両，白 は大一両二分，藤は大一両二分，調布は二尺，炭は二斗，和炭は二斗，長功は六人（藤工に二人，鑄に二人，磨に二人），中功は七人小半，短功は八人大半，

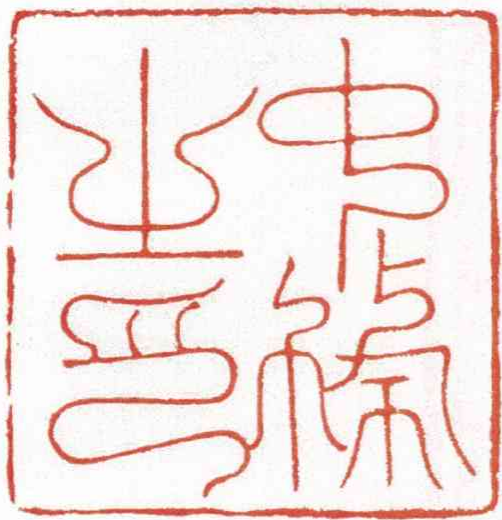
とあり鑄造された銅印であることがわかる。またここから詳細な印章の重量の規模もわかる。印文の種類が多さから，印一面の材料は少ないが，材料の多くを消費したであろうことが予想される。これは諸国印においても同じことが言える。

諸司印の印影について，初見は中務省印（図5，印文「中務之印」），天平12年（740）の文書に捺されているものである。中務之印はおそらく大宝令の公式令により，ただちに初鑄されたものであったと考えられている。「続日本紀」によると，

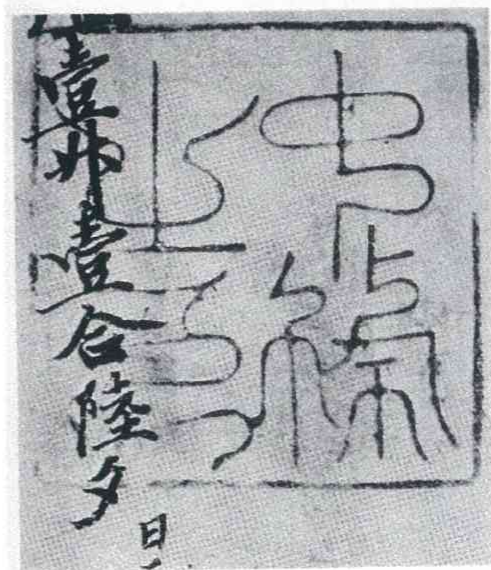
養老三年十二月乙酉，式部・治部・民部・兵部・刑部・大蔵・宮内・春宮印充各一面。
養老三年十二月乙酉，式部・治部・民部・兵部・刑部・大蔵・宮内・春宮の印各一面を充つ。

とあり，ここから八省のうち中務省を除く他の七省の印はようやく養老3年（719）になり給付されたものであったことがわかる。よって，印の給付は各省一律で行われたものではないと考えられる。

印文は「中務之印」や「式部之印」（図6）のように，各省に「之印」をつけたものとなっている。



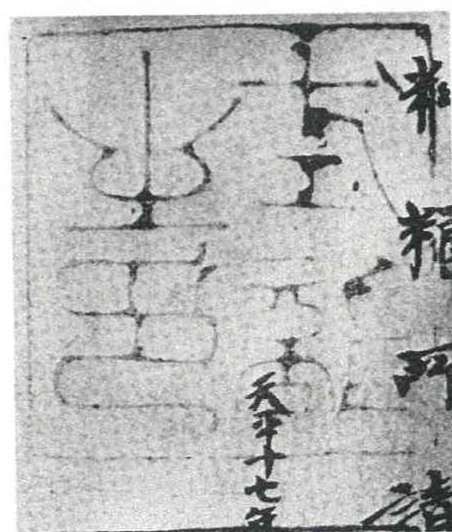
「中務之印」天平17年（原寸）



正倉院文書『右大舎人寮解』 押印箇所
（部分縮小）（図5）



「式部之印」天平17年（原寸）



正倉院文書『式部省移』 押印箇所
（部分縮小）（図6）

（4）諸国印

大宝令制下では、日本全土を66国2島に分け、国を大小中下の4等級とし、それらの等級に応じて一定数の国司を置いた。そして各国に国印を頒布したとされる。公式令では諸国印に関して、「方二寸，上京公文及案，調物則印。（方二寸，京に上る公文及び案，調物則ち印せ。）」と記載がある。よって、寸法は方二寸，現在では約6センチ四方の印である。地方諸国から京に上る解（被官の官司から所管の官司に上る公文書）及び案，その他

の文書・調物などに押すこととされた。印の材料は内印・外印・諸司印と同じく鑄造印である。今日では古文書の内に50余ヶ国の国印の印影を求めることができる。諸国印の印影の残る最古の文書は、大宝2年(703)の『筑前国嶋郡川辺里戸籍』(正倉院文書)にある「筑前国印」(図7)である。大宝元年(702)6月に7道に「新印様」を頒布しており、これと同時に各国に国印を頒布しているため、「筑前国印」はこの年に筑前国に賜った印であると考えられる。



「筑前国印」大宝2年(原寸)



正倉院文書『筑前国嶋郡川辺里戸籍』
押印箇所 (部分縮小) (図7)

印文については、「筑前国印」のように「〇〇国印」といったものとなっている。印文の書体について、木内武男氏の『日本の官印』本文18ページ、17～22行目には以下のような記載がある。『当初の印文の書体はおおむね同一規格になり、諸司印とはまた明らかにその形制を異にしていることが認められる。しかし「山背国印」と「山城国印」(延暦13年、山背国を山城国と改む)、「大倭国印」と「大和国印」(天平宝字元年、大倭国を大和国と改む)などの両者を比較するとき、印文の書風に明らかに相違が認められ、国印の印文としての独自性が失われている。恐らく天平末年以後、国印の一部改変の行われたことが知られる。』とある。これの是非については第2章第3節で比較検証することとする。

第3節 公印・私印について

古文書や現存古印を見ると、第2節で述べた官印の他に、これに類した印章が多く存在する。官印に準じた印を「公印」とし、その性格のもっとも近いものに、国倉印・郡印・郷印・軍団印・国師印・僧綱印などがある。また官司の印が次第に権威のあるものとなるにしたがい、神社・寺院などで官司に倣って印を用いるようになり、特に勅願寺などでは

勅宣によって寺印を給付されたものもあった。

○公印

(1) 国倉印

国倉は国衙に設置された正倉であり、それぞれ倉印の使用が認められる。現存するものに隠岐・駿河・但馬の3倉印があり、古文書には他にも7ヵ国のものも知られている。以下、現存する「隠岐倉印」(図8)「駿河倉印」(図9)を載せる。



「隠岐倉印」(原寸) 島根県隠岐家所蔵 (図8)



「隠岐倉印」印影(原寸)



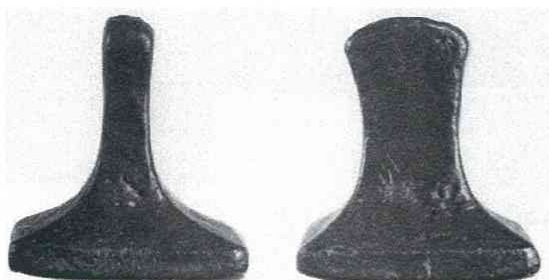
←「隠岐倉印」鈕 (縮小)



「駿河倉印」(原寸) 滋賀県法厳寺所蔵 (図9)



「駿河倉印」印影(原寸)



←「駿河倉印」鈕（縮小）

どちらも銅印であり、幅が広く孔がない鈕であるところも似ている。印影より、「倉印」字を見ると書体も似通っている。よってこの2顆は同時期に作られたものではないかと考えられる。

特に「隠伎倉印」について、寸法は国印と同一であるが、その「印」字の書体は諸司印である八省の印のものに酷似している。（図6「式部之印」参照）そのため、恐らく各省印鑄造ごろの製作にかかるものと考えられている。

（2）郡印・郷印

地方政治は直接中央政府より派遣された国司の任を重くし、郡司にはその責任が比較的軽かったと考えられている。律令制が確立されるに及んで、^{くにのみやつこ}国造¹⁸の伝統を引いた郡司の権力は大幅に削減された。よって郡司は律令制における地方政治の最末端として、国司の願使に甘んずる存在となった。これにより、さらに郡印制定の必要が認められなかった。そのため、公式令には郡印・郷印についての規定がない。公式令での規定がないことは、形式の自由さを物語るものでもあり、正方形だけでなく長方形のものもある。また大和国（現在の奈良県）の「十市郡印」（図10）のように四つの角を切ったものもある。寸法も「十市群印」は4.2センチ四方であるが、近江国（滋賀県）の「坂井郡印」（図11）は5.2センチ四方と様々である。



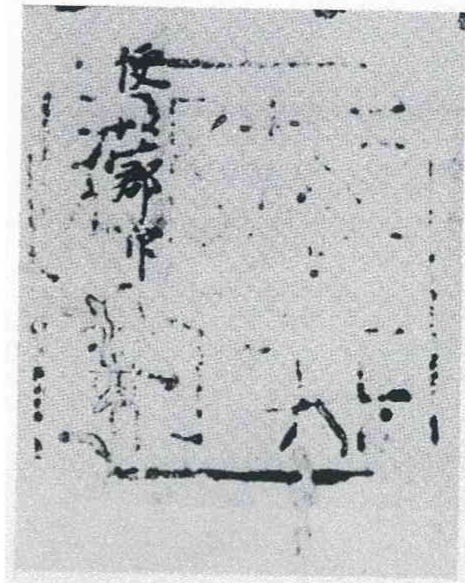
「十市郡印」天平宝字5年（原寸）



東南院文書『大和国十市郡池上郷家地売買券』
押印箇所（原寸）（図10）



「坂井郡印」天平宝字2年（原寸）



東南院文書『越前国坂井郡司解』押印箇所
（原寸）（図11）



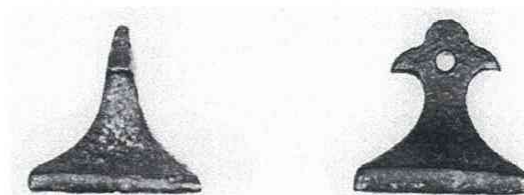
「伊保郷印」（原寸）



印影（原寸）

豊田市郷土資料館所蔵

（図12）



「伊保郷印」鈕（縮小）

上の三河国賀茂郡「伊保郷印」（図12）は現存の郷印である。寸法は3.2センチと郡印に比べると小さい。また鈕の形が倉印（図8，図9参照）と異なり鈕頂部に陵をつけて尖らせた「苔鈕」となっている。また鈕に穴が開けられている。書体はここまで載せた印よりも正確性に欠けている。

(3) 軍団印

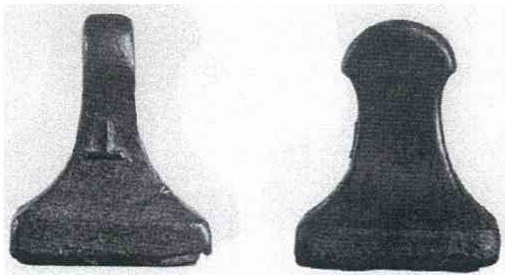
軍団とは律令制において諸国に置かれた軍事組織のことである。概ね4郡に1軍団が置かれたとされている。今日では「御笠団印」(図13)と「遠賀団印」(図14)の2顆が現存しており、これによってのみその例証が認められる。



「御笠団印」(原寸) 東京国立博物館蔵
(図13)



「御笠団印」印影(原寸)



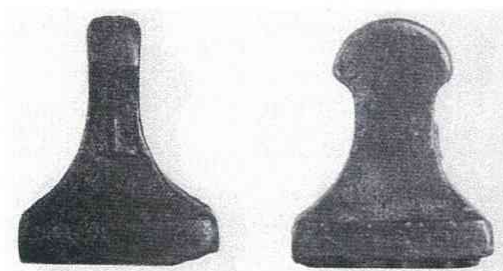
←「御笠団印」鈕(縮小)



「遠賀団印」(原寸) 東京国立博物館蔵
(図14)



「遠賀団印」印影(原寸)



←「遠賀団印」鈕(縮小)

どちらも寸法は4.2センチである。また弧鈕無孔であり、倉印に近いものであるが、倉印よりも鈕の縁が張り出した形となっている。「御笠団印」と「遠賀団印」の書体を比べると、「御笠団印」は太め、「遠賀団印」は細めに刻されている。また「印」字も異なっている。

(4) 国師印

国師は諸国に置かれ、国司とともに国内の寺院を監督し、財物田園を調べ、経論の講説法務に携わった。国分寺が創設されるに及んで国分寺僧をもってこれに任じ、のちに講師と改称した。中世になってからは、国家の師表たるべき高僧に対して朝廷から国師の称号を贈られることになる。そのため、古文書所載の押印も少ないが、天平神護元年(765)『因幡国国師牒』に「因国師印」(図15)を見ることができる。寸法は5.0センチ、「印」字の書体が「筑前国印」(図7)に近い形となっている。



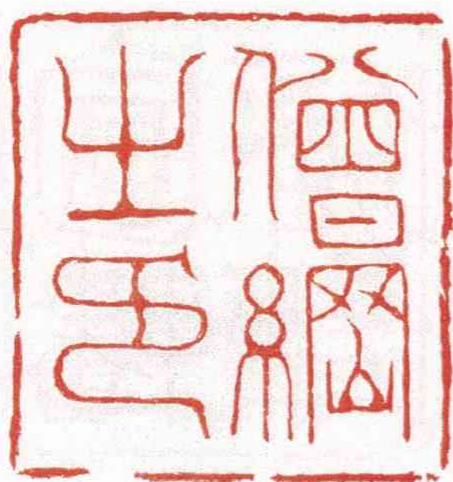
「因国師印」天平神護元年(原寸)



東南院文書『因幡国国師牒』押印箇所
(部分縮小) (図15)

(5) 僧綱印

僧綱とは僧正・僧都・律師をいい、徳行篤く法務を綱維することに耐えられる者をもって任用し、全国の僧尼を統べる職である。印文は「僧綱之印」である。寸法は国印に準ずる方二寸(約6センチ四方)である。すでに霊龜2年(716)に賜給され、天平16年にはその乱用を戒められたようである。以下の図版は延暦23年の僧綱牒に見られる「僧綱之印」(図16)である。



「僧綱之印」延暦23年（原寸）



東南院文書『僧綱牒』押印箇所（部分縮小）

（図16）

（6）神社印・寺院印

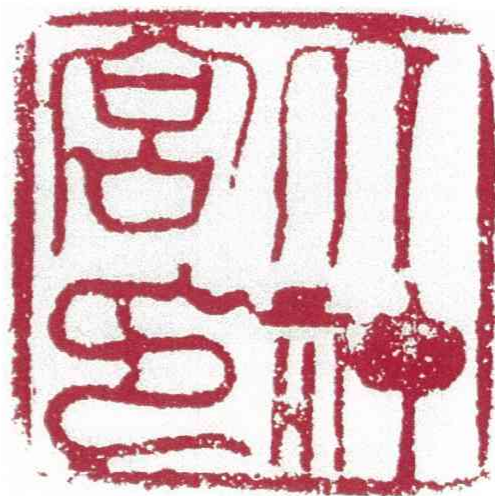
当時，社寺，特に寺は準官庁的性質を有していたため、印も有していたとされる。

神社印として，現存印に「大神宮印」（図17）・「内宮政印」（図18）・「豊受宮印」（図19）などが知られる。

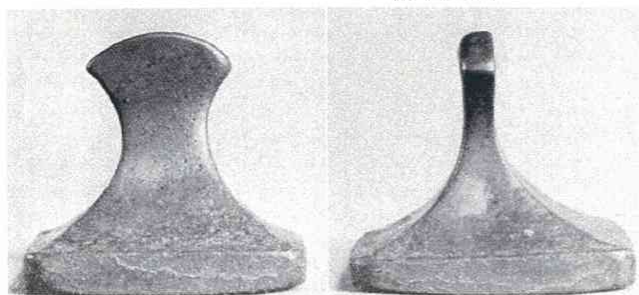


「大神宮印」（原寸）三重県神宮司庁蔵

（図17）



「大神宮印」印影（原寸）



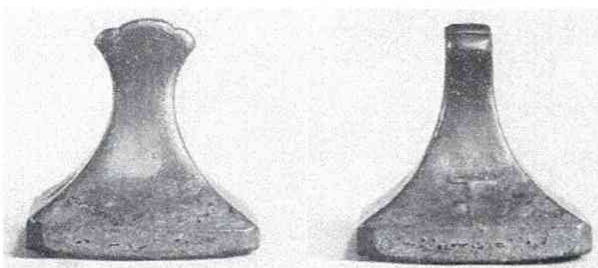
←「大神宮印」鈕（縮小）



「内宮政印」(原寸) 三重県神宮司庁蔵
(図18)



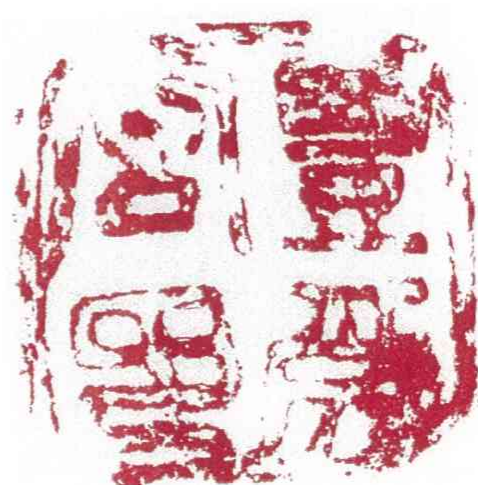
「内宮政印」印影(原寸)



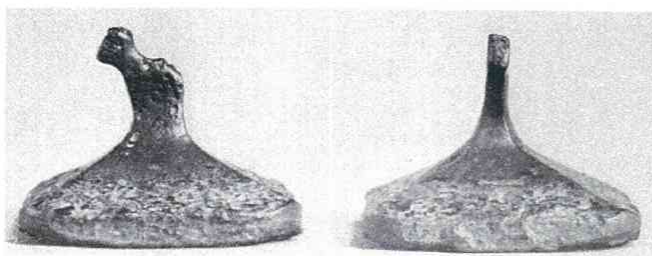
←「内宮政印」鈕(縮小)



「豊受宮印」(原寸) 三重県神宮司庁蔵
(図19)



「豊受宮印」印影(原寸)

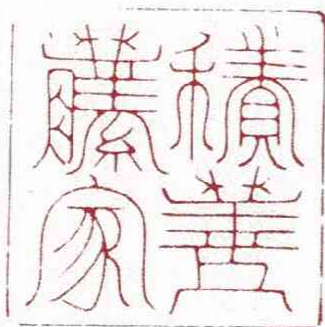


←「豊受宮印」鈕(縮小)

図版として載せた3種類の印は全て平安時代に鑄造されたと考えられている。寸法について、「大神宮印」は6.3センチ、「内宮政印」は5.4センチ、「豊受宮印」は6.2センチとなっている。また鈕を見ると、「大神宮印」は緩やかな曲線の弧鈕であり、孔はない。「内宮政印」は頂部に刻目を入れた弧鈕に近い苔鈕であり、「大神宮印」と同じく孔がない。「豊受宮印」は鈕頭の半分ほどを欠損しているが、苔鈕で孔を有しているように見える。印影から、「大神宮印」は他の2顆に比べはっきりとした印文を見ることができるが、「内宮政印」は彫りが浅く摩損していることもあり、辺縁は印文を冒している。「豊受宮印」においては火事にあったことから特に印面が荒れており、籠字状の印文になっている。全ての印に共通する「宮」・「印」字を比較すると、書体が異なっていることが分かる。ここから社寺印の寸法や鈕、書体に関する明確な規定はなかったと考えられ、神社・寺院によって様々な印が作られていたのではないかと考えられる。

○私印

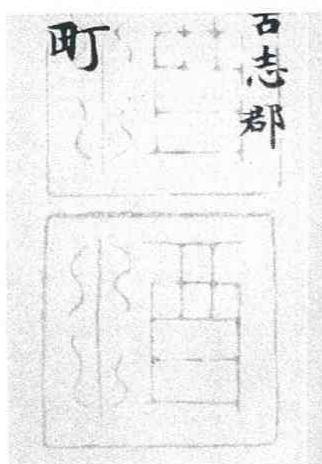
『続日本紀』¹⁹の記載によれば、天平宝字2年(758)8月藤原仲麻呂²⁰は朝廷より「恵美押勝」の名を賜り、「恵美家印」の使用を認められたとあり、これが最初に用いられた私印であると考えられる。「恵美家印」が押された古文書は残っておらず、どのような印であるかは分からない。古文書所載の押印としては、光明皇后²¹の「積善藤家」(図20)「内家私印」(図21)、酒人内親王²²の「酒」(図22)、正倉院文書中に「生江息嶋」(図23)「鳥豊名印」(図24)「画師池守」(図25)などの私印がある。制度に関係なく作製されたもので、形状・書体に自由さが認められる。



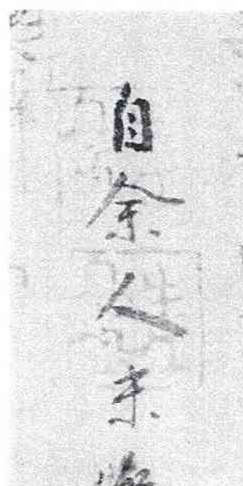
「積善藤家」奈良時代(原寸)
(図20)



「内家私印」『瑜伽師地論』(縮小)
(図21)



「酒」『酒人内親王御施入状』(縮小)
(図22)



「生江息嶋」『生江臣息嶋解』(縮小)
(図23)



「鳥豊名印」(図24)



「画師池守」(図25)

私印が作製されるようになった初めの頃は4字印であったが、次第に2字印・1字印などがあらわれ、同時にその大きさに於いても自由なものとなった。現存印より、二荒山神社の「東廐私印」(図26)「錦衣私印」(図27)「私印」(図28)からその様子を見ることができる。また、個人印の1字印の名印には名の上の1字を用いるのが通常であった。



「東廐私印」(原寸) 栃木県二荒山神社蔵 (図26)



「東廐私印」印影(原寸)



「錦衣私印」(原寸) 栃木県二荒山神社蔵
(図二十七)



「錦衣私印」印影(原寸)



「私印」(原寸) 栃木県二荒山神社蔵
(図二十八)



「私印」印影(原寸)

律令下の印は第一章第二節で述べた通り、規定によりすべて鋳銅印であることから、私印においても銅印であったとされる。しかし、鎌倉時代にはなるが「華嚴供印」(図二十九)などのように木印のものも残されていることから、私印の中には木印のものもあったと考えられる。



「華嚴供印」(原寸) 奈良県東大寺蔵
(図二十九)



「華嚴供印」印影(原寸)

第4節 倭古印の集譜について

古印は作製当時印影を記録保存していたことであろうが現存しておらず、古文書上にその印影を見るのみである。これを搨模²³して集譜することは江戸時代に始まり、考証学²⁴の隆盛と共に盛んになった。ただし古印を押捺した印影の多くは、御物の正倉院文書等であり、閲覧の制限が厳しかったことから、江戸から明治にかけて集譜された古印譜の多くは重模²⁵を重ねたものも多い。

こうして出来上がった印譜には藤原貞幹²⁶の「金石遺文」,「公私古印譜」,大竹蠹翁の「令号璽史」,穂井田忠友²⁷の「埋麝發香」,松平定信²⁸の「集古十種」等の印譜が著され、これらをまとめた長谷川延年²⁹の「博愛堂集古印譜」がある。

写真技術の無かった時代、印影の集譜は専ら搨模や臨模³⁰であり、さらにこれを重模・模刻したもので、伝模³¹の内に真を失うことも多かった。その中で「埋麝發香」は原典を忠実に模刻したものとして評価が高い。

昭和34年(1959)二荒山から古印7面が発掘されたことにより、倭古印に対する関心が再び高まった。昭和38年(1963),東京国立博物館において「日本古印特別展」が開催され、木内武男が図録として『日本の古印』をまとめた。更に木内氏は正倉院文書の実大印影写真の提供を受けて、『日本の官印』を著している。

近年では国土開発の影響を受けて、古印に関する発掘や発見が増えている。国立歴史民俗博物館は平成4年～6年度(1992～1994),日本古代印を対象とした基礎的研究を行い、報告書『日本古代印集成』としてまとめている。

本論文の図版は主に『日本の古印』,『日本の官印』,『日本古代印集成』より引用している。原印のあるものは押印したものが印影として載せられている。古文書にある印の印影は転写であり、遺存する同一印影を適宜比較勘案して復元につとめられたものである。

第2章 倭古印の分析

第1節 「天皇御璽」の変遷

「天皇御璽」は『聖武天皇施入願文』と『法隆寺献物帳』のものが同じ印であるとされ、『法隆寺献物帳』のものから現行のものまで、歴史上に6個存在すると言われている。また同じ印文のもので長きに渡って使用されてきた印は、「天皇御璽」の他には存在しない。よって「天皇御璽」は倭古印の変遷をたどる上でも最も適した印であると言える。しかし、私は『聖武天皇施入願文』と『法隆寺献物帳』のものは、復元を見る限り別の印であるように感じられる。そのため、最初にこの2顆の比較を、復元印影と遺存する印影より行い判断した後、他の「天皇御璽」も含め、寸法、材質、字形等から分析し、倭古印の特徴を考える。図版については、(1)から(4)は文献記載の年号を記述し、転写された印影と押印箇所を載せる。(5)、(6)は原印があるため、印影のみを載せる。(4)から(6)は倭古印が襲用された時代のものではないが、「天皇御璽」の変遷比較のために載せる。

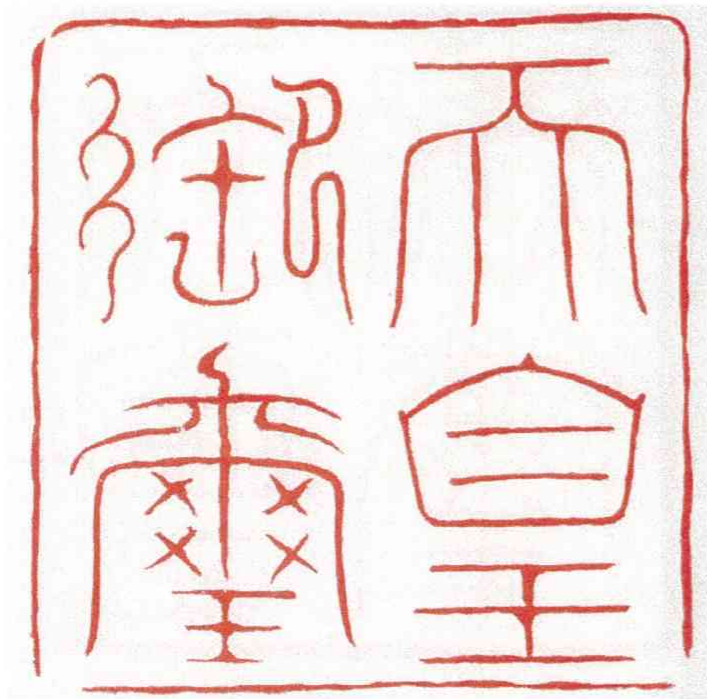
(1) - 1 天平感宝元年(749) 6ページ図1参照

(1) - 2 天平勝宝8歳(756) 6ページ図2参照

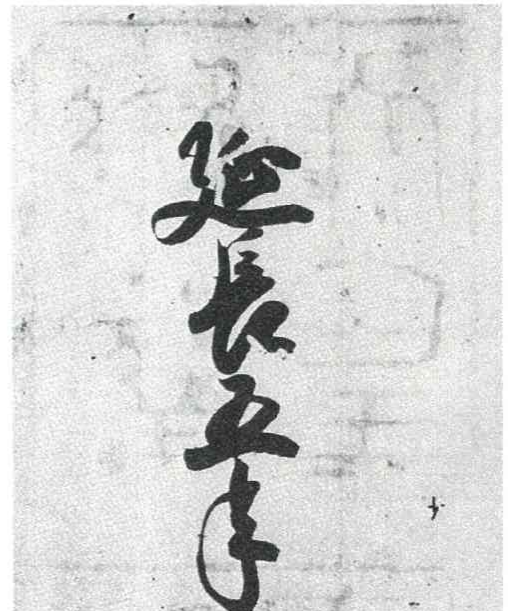
どちらも奈良時代、寸法8.6センチ

(2) 延長5年(927)

平安時代、寸法8.8センチ



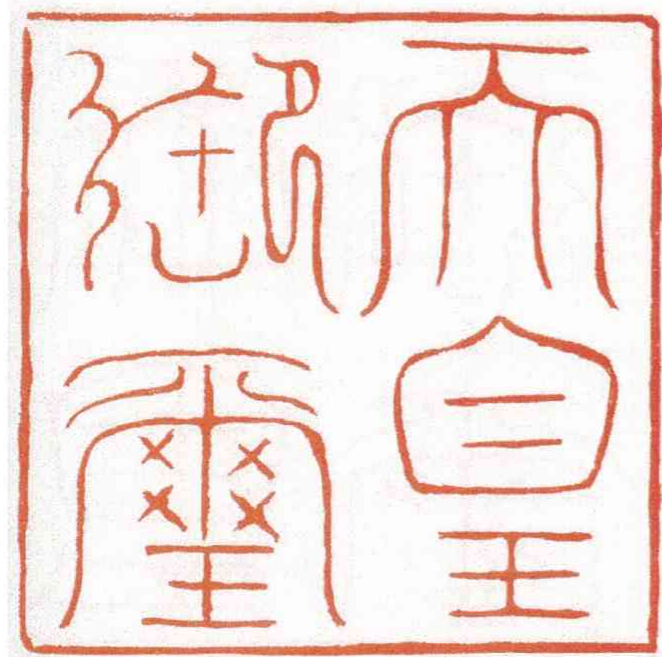
(原寸) (図30)



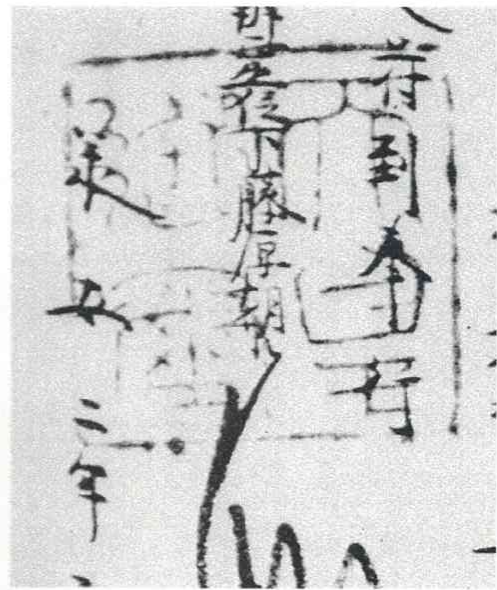
『円珍贈法印大和尚位并智証大師
諡号勅書』押印箇所(縮小)

(3) 承2二年 (1172)

平安時代, 寸法8.6センチ



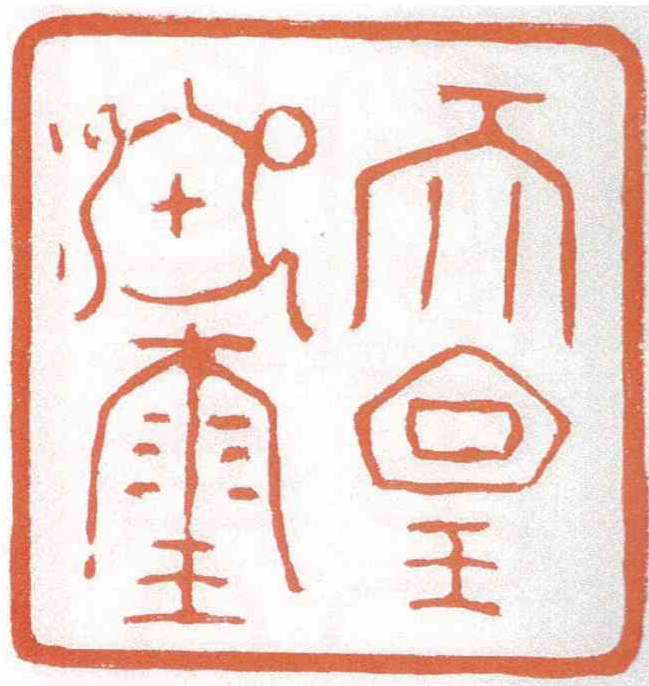
(原寸) (図3 1)



『太政官符』押印箇所 (縮小)

(4) 明和4年 (1767)

江戸時代, 寸法8.5センチ



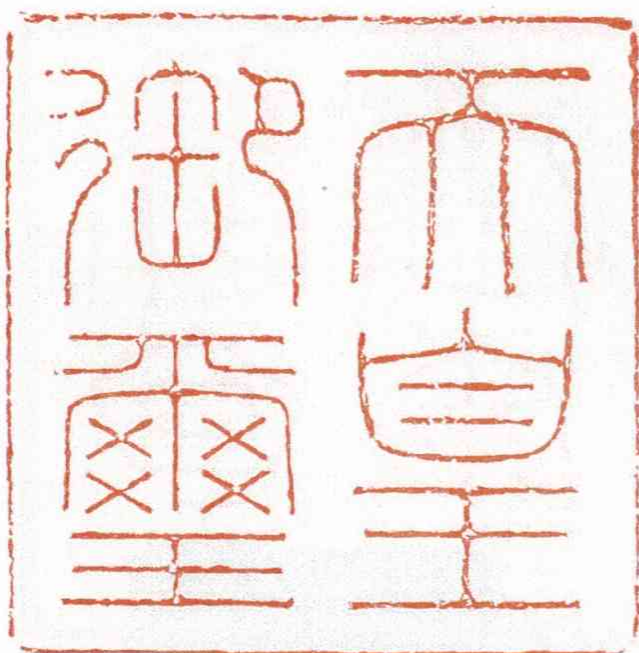
(原寸) (図3 2)



『家仁親王一品宣下位記』押印箇所
(縮小)

(5) 明治4年5月3日～明治7年4月（1871～1874）

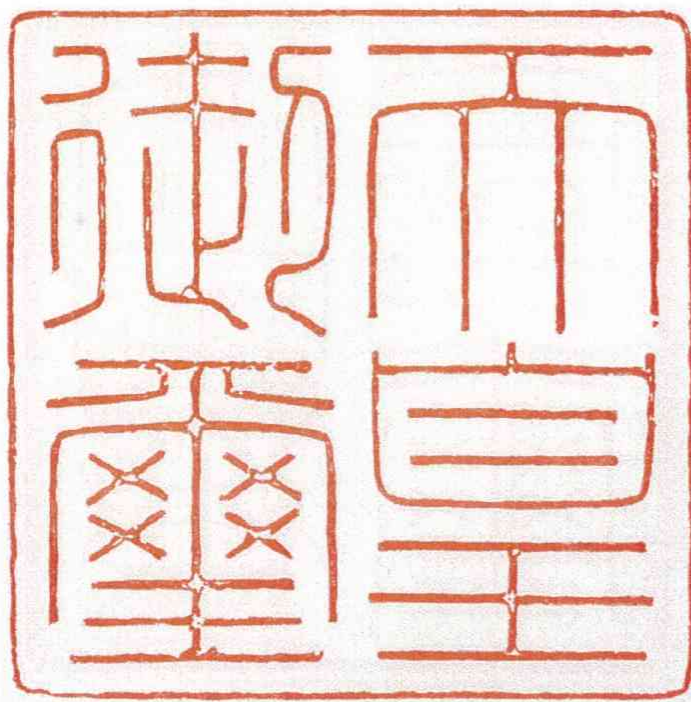
明治時代，寸法8.5センチ，石印 小曾根乾堂³²により刻される。



（原寸）（図33）

(6) 明治7年4月～（1874～）

明治時代，寸法9.0センチ，金印 安部井櫟堂³³が蠟型原型を作製，秦藏六³⁴により
鑄造される。



（原寸）（図34）

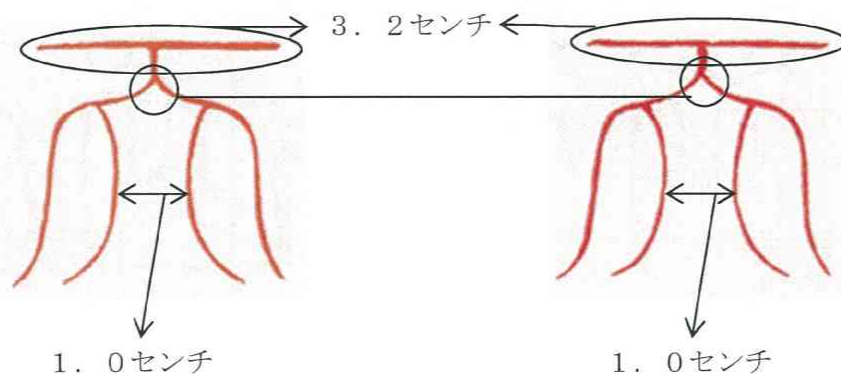
また、字形の比較の為、7顆の印文から1字ずつ切り抜き、表として掲載した。

	天	皇	御	璽
(1) 1				
(1) 2				
(2)				
(3)				
(4)				
(5)				
(6)				

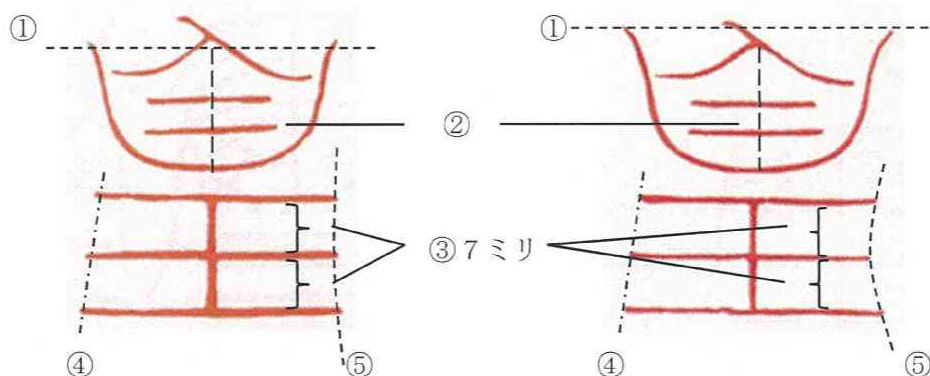
最初に、(1) - 1『聖武天皇施入願文』の印影と、(1) - 2『法隆寺献物帳』の印影が同一のものであるかを比較する。かなり精密に復元されているため、復元印影を比較することとした。

寸法について、どちらも8.6センチとなっている。材質は第1章第1節5ページでも記載したとおり、おそらくどちらも銅印であったと考えられる。ここまでで差異は見られない。また、印影全体を眺めるだけではなかなか違いが分からない。よって字形について1文字ずつ細かく比較検証することとする。

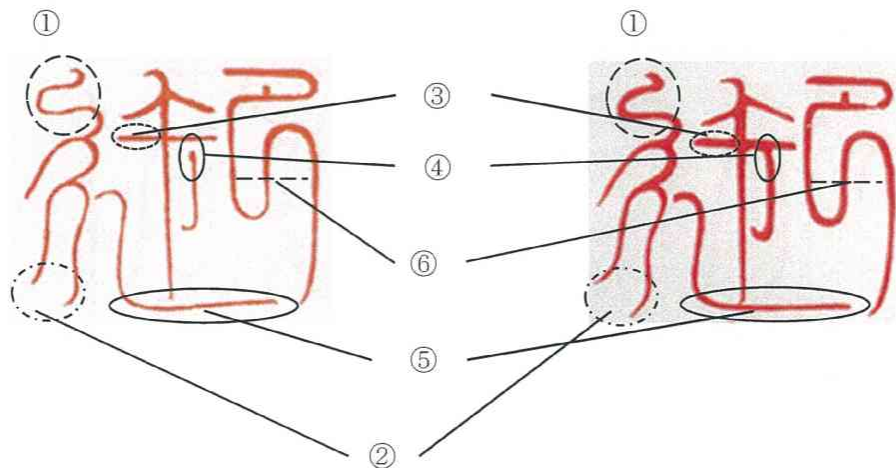
まず「天」を見ると、1画目の横画が3.2センチと等しい。また、2画目と3画目が接する部分の空間の形がよく似ている。さらに4画目と5画目の距離が1.0センチとなっている。以下の図版は左が『聖武天皇施入願文』(1とする)、右が『法隆寺献物帳』(2とする)のものである。これに則り、他の3文字も同様の配置で載せることとする。



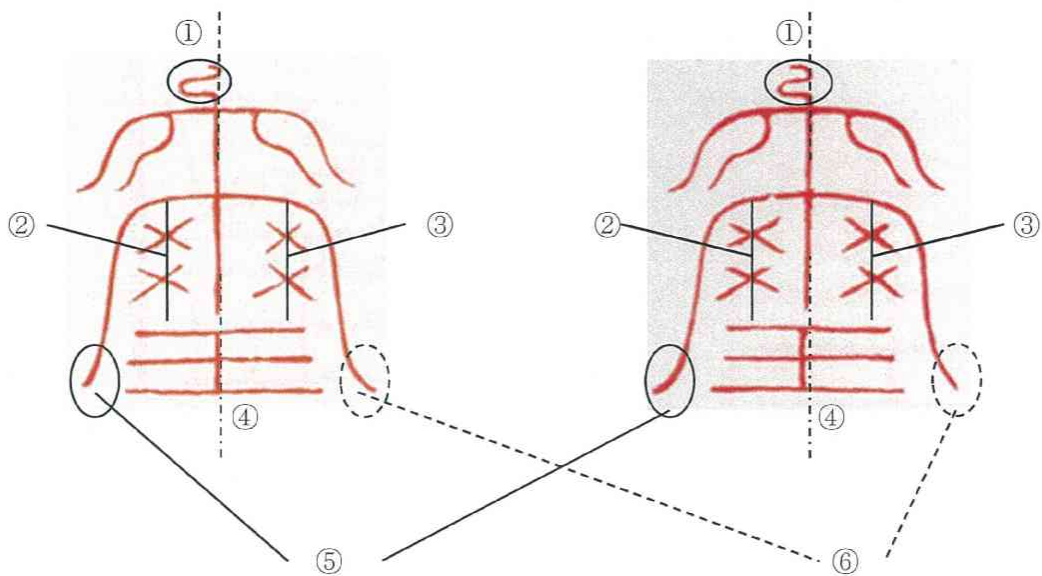
次に「皇」字を比較する。「白」部分の受け皿状になっている画について、1は「入」部分の交わる点より下に始筆があるのに対し、2は「入」部分の最上部に近い位置に始筆がある。(①)しかし「白」部の横画間の空間について、どちらも上から7ミリ、3ミリ、4ミリとなっている。(②)また、「王」部の横画間も7ミリずつと等しい。(③)さらに「王」部の横画の始筆について、上から徐々に長くなっている。(④)「王」部の横画の終筆部分を見ると、1はほぼ長さが揃っているのに対し、2は2本目の横画が短く、3本目の横画が特に長い。(⑤)よって①と⑤の部分で違いが見られる。



3文字目の「御」はまず全体を見ると太さに違いがある。1は全体的に細めであるのに対し、2は前者より太めである。次に6点の部分に注目して細かく見た。まず「彳」部の最初について、1は緩やかな曲がりの連続であるが、2では2回目の曲げ部分が直線状になっているのがわかる。(①)また「彳」部の最終部の2か所のはらいの角度が、1はやや下向きで角度が違うのに対し、2は1よりも左横向きに、ほぼ同じ角度ではらっているように見える。(②)「卸」部の3画目の横画について、1よりも2のほうが右下がりの角度がきつい。しかしどちらも6ミリと同じ長さである。(③)「卸」部の短い縦画部分が、1では上部の横画と離れているのに対し、2では上部の横画に接している。(④)「卸」部の最後の横画について、2より1のほうが右上がりの角度が急になっている。(⑤)最後に「卩」部の縦線3本の空間についてみると、どちらも左の空間幅が4ミリ、右の空間幅が6ミリと等しくなっている。以上より「御」字は「天皇」に比べて異なる点が多くある。



4文字目の「璽」は「御」と同様に異なる点が多くある。まず、最上部の始筆部分が1よりも2のほうがほんの少しだが長い。また、1は中心の点線より少し出ているが、2は点線の内側に収まっている。(①)「璽」の左側の2つの「メ」部分について、1は上部の「メ」の交差部分より下部の「メ」は左にずれている。対して2は上部・下部共に交差部分が揃っている。(②)右側の2つの「メ」は、1では上部の「メ」の交差部分の真下に下部の「メ」があるが、2は上部の「メ」より下部の「メ」が右にずれている。(③)「璽」の「王」部の縦画の位置だが、上部の縦線から下に線をおろすと、1より2のほうが大きく左にずれているのが分かる。(④)最後に、下方向にはらった2本の線について、左側の画は2のほうが少々長く、(⑤)右側の画は1のほうが長い。(⑥)



以上復元印影の比較より、「天」字に大きな違いは見られないが、「皇」「御」「璽」は細かい部分で多くの違いがあることが分かる。特に「御」の⑤や「璽」の②、③、④が大きく異なって見えるところから、別の印の可能性もあると考えている。

この考え方が本当に正しいのか、さらに古文書所載の印影も比較する。以下の図版は、図1・2の古文書から別の箇所を押印された印影を写したものである。



『聖武天皇施入願文』
「天皇御璽」(原寸)
(図35)

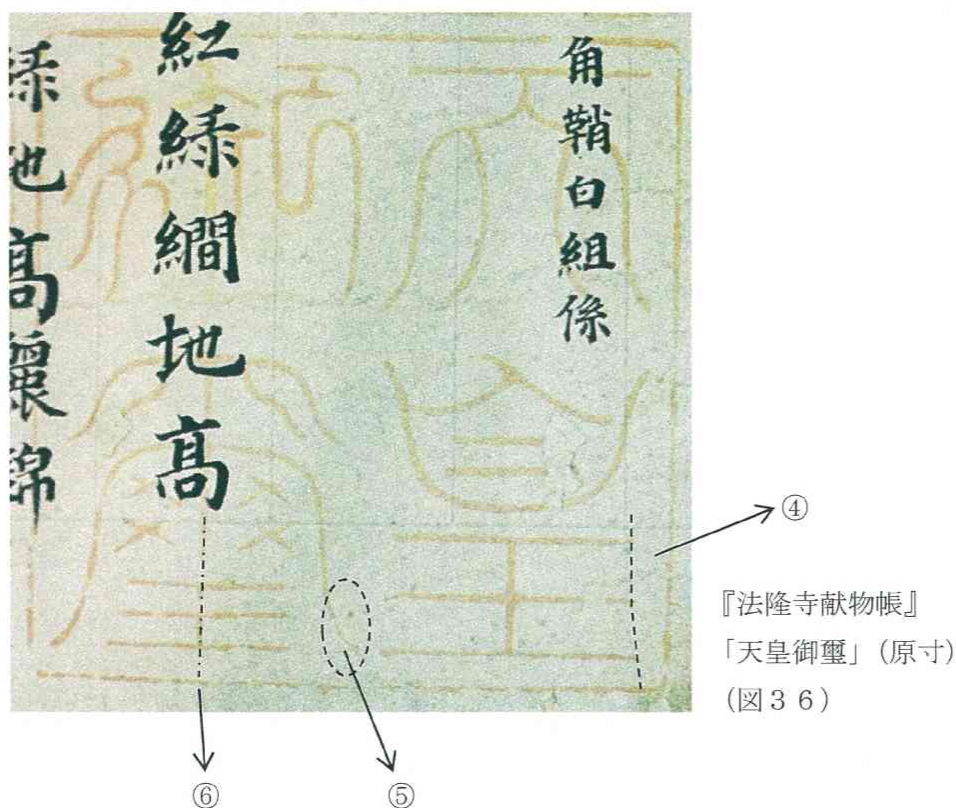


図3 6は古文書に押印されていたものが少々傾いていたがそのまま掲載した。復元印影と図3 5・3 6と比較すると、大きな違いが各3点ずつあったため、図上に書き込み、①～⑥で番号を振った。

どう違うのかだが、①は受け皿状になっている画の始筆が復元印影よりも上から始まっていることが違う。この①は『法隆寺献物帳』の復元印影と同じ位置からになっていることが見て分かる。②は、2本目の横画が一番長くなっており、復元印影の長さがほぼ揃ったものとは異なっている。④も②と同じ箇所を比較しているのだが、こちらも対応する復元印影と比べると、図3 6のほうが2本目の横画が長くなっている。これはどちらかと言えば『聖武天皇施入願文』の復元印影に近い形をしている。③は、補助として引いた縦線上に下の「メ」の中心が来ていない。対応する復元印影はどちらも縦線上に「メ」の中心があった。この③は『法隆寺献物帳』のものと同じ形をしているように見える。続いて⑤は、復元印影より終筆部分が長く、『聖武天皇施入願文』の復元印影や図3 5の終筆部分と同じ形をしているように見える。最後に⑥は上の縦画に合わせて延長線を引いたところ、対応する復元印影よりも「王」の縦画が左にずれておらず、『法隆寺献物帳』の印影に似た位置に縦画があることが分かった。

以上のように、同じ古文書内の印影であっても違う箇所があるのに加え、古文書が異なっても同じ形をしている箇所もある。最初の比較では異なる印を用いているのではないかと考えていたが、この結果から、同一印を使用している可能性もあるように感じる。

もしこの2顆が同一印を使用していると仮定すると、差異が生じる原因の1つとして、私は押印の仕方に問題があるのではないかと考える。

よって当時の押印方法について記載のある書物を探したところ、押印方法ではないが、印肉について『日本の古印』内の木内武男氏による「日本古印の沿革」145 ページ下段2行目より、「今日使用されているがごとき朱肉は、中国宋代にはじまり、わが国にあっては鎌倉時代以降のことである。古くは水印と称して、朱（天然の辰砂³⁵ または朱土）を膠または糊で練ったものを用いて押捺されていた。」と記載されていた。この根拠として、『延喜式』主鈴年料条に、

年料所須、朱沙十二両、膠八両。位記料、練絲三両、苧二斤、賃布一丈。敷印板料、柳筥二合。納印板料、赤土一斗。

年料を須いる所、朱沙を十二両、膠を八両。位記の料に、練絲を三両、苧を二斤、賃布を一丈。印板を敷く料に、柳筥を二合。印板を納める料に、赤土を一斗。

とある。このことから、私は水印とは、おそらく印泥のように粘り気があり印に附着しやすいものではなく、「水」と付くようにサラサラとしていて印に留まらず、文字の溝にも入り込むようなものだったと予想する。だとすると、朱の付き具合にかなりのばらつきが出て、線が太くなったり、朱が付いていない箇所が現れたりしたのではないかと考えられる。

水印の他にも、紙の歪みや押印する環境によっても細かい違いが現れてくると思う。よって、私は『聖武天皇施入願文』と『法隆寺献物帳』の印影は同一印を使用している可能性があると考え、当時の押印方法や押印環境が差異を生じさせる原因となったと結論付ける。

次に「天皇御璽」の変遷について考える。まず寸法について、(1) 8.6センチ、(2) 8.8センチ、(3) 8.6センチ、(4) 8.5センチ、(5) 8.5センチ、(6) 9.0センチとなっている。律令下の規定では約8.7センチとなっているため、大きな差はない。しかし(6)のみ少々大きくなっている理由として、「方三寸」を唐尺ではなく曲尺で作製したためではないかと考えられる。

字形については、(1)は筆意が感じられ、他の印に比べて特に細く、研ぎ澄まされているように感じる。また、線に丸みがあり柔らかさも兼ね備えているように見える。さらに「天」「皇」「璽」はほぼ線対称であることから、より整った印であるという印象を受ける。書体は小篆が元になっているように感じられる。

(2)は(1)の字形や書体を元に作製されたようだが、(1)に比べると堅さがある。さらに「御」の中心部分の字形が大きく異なっている。「璽」の中心より左側に線が伸びていることに加え、「王」部の横画が下に行くにつれて徐々に短くなっている。印全体を見ると、「天皇」より「御璽」が小さく見える。「御」が小さいため、上辺と「御」字の間に隙

間が生じている。

(3) は(2)の字形に近い。「皇」だが、「白」より「王」が小さく見えることから、バランスが悪いように感じられる。「璽」は最上部の横画と下の線の間に隙間が出来ている。印全体を見ると、「天」より「皇」が右に寄ったことで「皇」と「璽」の間に大きな隙間ができています。

(4) は今までの「天皇御璽」に比べて、大きく字形や雰囲気異なる。まず目につくのは、辺縁の太さである。(1)～(3)は文字と同等の細さの枠となっているが、(4)は文字よりもかなり太い。字形については、「皇」の「白」部の中が、それまでは横線2本であったのに対し、(4)は中が「口」になっている。「王」部も極端に小さい。また、「璽」の「メ」の部分が横線3本になっている。他にも文字が傾いているといったことから、(4)は少々粗雑さが目立つ印になっているように感じる。

(5) は(4)の印と異なり、かなり整った印となっている。石印の為か、文字の線から刀が入っていることが分かる。書体は印篆に近くなっているが、まだ柔らかさを感じる。「天」は(2)の「天」に近い。文字と辺縁の間に等しく余白があるように見える。

(6) は余白をほとんどとらず、印面を4つに区切ったところに印篆を用いてきっちりと収めている。線の太さや分間も等しいことから、(1)～(6)の中で最も整った印であると考えられる。しかし、倭古印の趣はもう感じられない。

以上より、「天皇御璽」の書体は小篆から印篆へと変化していったと考えられる。また、最初の柔らかさをもつ字形から、徐々に硬さを帯びていったと思われる。倭古印が襲用された時代に当てはまる(1)～(3)の印の特徴より、倭古印は小篆に近い書体であり、独特の柔らかさを帯びた印であることが分かった。

第2節 天平年間制作の官印からみる字体特徴

天平年間とは729年から749年までの期間を指し、奈良時代の最盛期に当たる。この期間に作成された、官印が押印された古文書は現在に至るまで多く残されている。数にして諸司印12顆、諸国印35顆ある。以下はその印文を表としてまとめたものである。

諸司印

1, 中務之印	2, 式部之印	3, 治部之印	4, 民部之印	5, 兵部之印
6, 刑部之印	7, 大蔵之印	8, 宮内之印	9, 春宮之印	10, 内侍之印
11, 左京之印	12, 右京之印			

諸国印

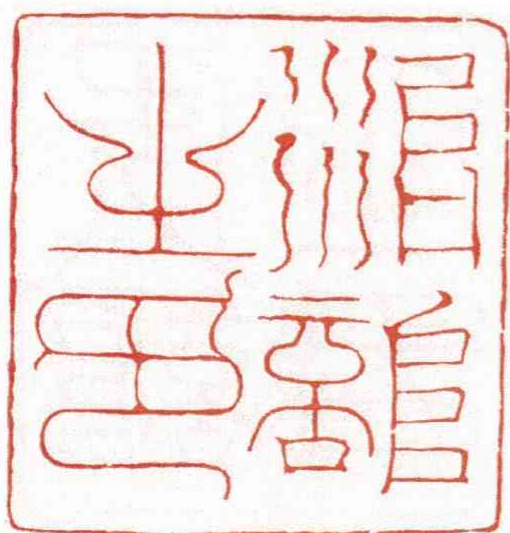
1, 山背国印	2, 大倭国印	3, 河内国印	4, 摂津国印	5, 伊賀国印
6, 伊勢国印	7, 尾張国印	8, 遠江国印	9, 駿河国印	10, 伊豆国印
11, 相摸国印	12, 武蔵国印	13, 安房国印	14, 下総国印	15, 常陸国印
16, 近江国印	17, 信濃国印	18, 上野国印	19, 下野国印	20, 越前国印

21, 佐度国印	22, 丹後国印	23, 但馬国印	24, 出雲国印	25, 隠伎国印
26, 備中国印	27, 周防国印	28, 長門国印	29, 紀伊国印	30, 淡路国印
31, 阿波国印	32, 讃岐国印	33, 伊豫国印	34, 筑後国印	35, 薩林国印

このように、古文書所載の諸司印と諸国印の印影の多さから、その当時官司や国の数に合わせて多くの種類が作られ、流通していたと考えられるため、倭古印の特徴を考える上で適した印であると考え。また、印文に共通する字として、諸司印には「之印」、諸国印には「国印」がある。よって諸司印と諸国印に分け、印文を細かく比較分析し、諸司印と諸国印に見られる特徴を探していく。

私は印影の字形の違いから、諸司印の字形は1・10と2～9と11・12の3種類に分けることができ、諸国印は1～35で大きな違いはなく、統一された字形を用いていたのではないかと考えている。上記の表の中で、特に特徴が表れている図版を以下に載せた。

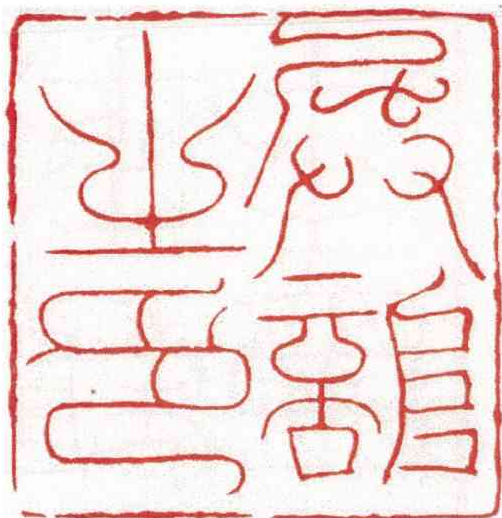
諸司印（1, 「中務之印」 2, 「式部之印」は10 ページ図5, 6を参照）



3, 「治部之印」天平17年（原寸）



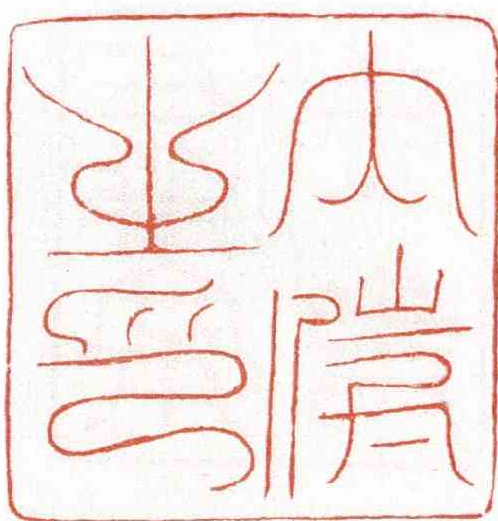
正倉院文書『裏儀司解』押印箇所
（縮小）（図37）



5, 「兵部之印」天平17年(原寸)



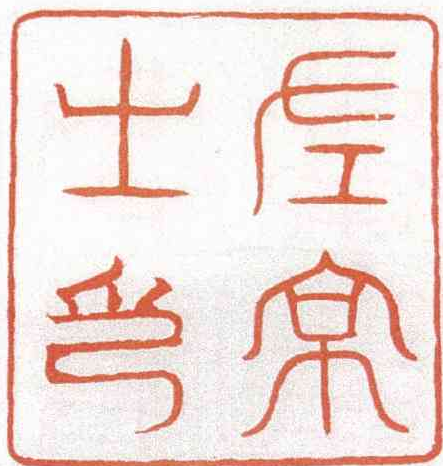
正倉院文書『兵部省移』押印箇所
(縮小) (図38)



10, 「内侍之印」天平8年(原寸)



正倉院文書『内侍司牒』押印箇所
(縮小) (図39)



11, 「左京之印」天平11年(原寸)



正倉院文書『校生手実帳』押印箇所
(縮小) (図40)

諸国印（2，「大倭国印」は39ページ図45を参照）



4，「摂津国印」天平8年（原寸）



正倉院文書『摂津国正税帳』押印箇所
（縮小）（図41）



23，「但馬国印」天平9年（原寸）



正倉院文書『但馬国正税帳』押印箇所
（縮小）（図42）

まず，諸司印の字形についてなぜ3種類に分けられると考えたのか，比較分析を通して論じていく。比較対象が分かりやすいよう，以下に3種類の印影を1字ずつ切り抜いて表として掲載した。比較する印影は1，「中務之印」（図5）5，「兵部之印」（図38）11，「左京之印」（図40）とする。

	寸法	1字目	2字目	3字目「之」	4字目「印」
1「中務之印」	6.6センチ				

5 「兵部之印」	6. 5センチ				
11 「左京之印」	5. 9センチ				

表を見ると、「中務之印」と「兵部之印」は字形や書風が似ている。寸法も1ミリ違うだけであり、大きな差はない。唯一、「印」字の字形が少々異なっている。「中務之印」の「印」字はかなり曲線的であるのに加えて、下部が「己」のような形になっている。しかし「兵部之印」の「印」字は少々硬さが見られる。下部の形は「巴」のように中心に1本縦線が入っている。「中務之印」、「兵部之印」は共通して全体的に小篆の様な雰囲気がある。

しかし「左京之印」は他の2顆に比べると字形や書風、寸法まで大きく異なっている。寸法に関しては、「左京之印」は「中務之印」や「兵部之印」に比べて5ミリほど小さい。因みに12「右京之印」も「左京之印」と同じ寸法となっている。また、「左京之印」の「之」字は直線的なものであるが、比較対象の2顆は両側の画がかなり曲線的であり、異なっている。「印」字について、「左京之印」では始筆部分が筆で書いたような形になっている。「中務之印」や「兵部之印」は太さにほとんど変化がないし、始筆部分も目立って書かれているわけではない。

全体を見ると「中務之印」や「兵部之印」は字の収め方がよく、文字と文字の間に大きな空間は見られない。文字の線は細めであり、「天皇御璽」にも見られるような線の柔らかさがあることから、印に統一感をもたらしているように感じられる。「左京之印」は文字と文字の間に空間が広く取られているし、印面全体に硬さが見られ、拙さを感じさせるものである。

これらを踏まえて、私は諸司印の1～10の印と11・12の印に大きな差が出来た理由に、京官と地方官の差があると考え。1～10の印は全て、律令下の中央にある京の各諸司に該当するものであり、基本的に統一書体を用いて作製され、使用していたと考えられる。対して左京、右京は地方官で京官と比べると位が下がるため、京官で用いられるものよりも寸法が小さくなり、字形に違いが見られるのではないかと考えた。

また、1・10と2～9の「印」字が異なる理由として、作製時期の違いがあるのではないと思う。第1章第2節諸司印の項(9ページ)に、「中務之印」は他の七省に比べて初鑄が早かったことを述べた。「内侍之印」の「印」字が「中務之印」と同じ形をしていることから、おそらく「中務之印」と同時期に作られたものであると考えられる。他の2～9

の印は1・10の印よりも後に作製されていることから、字形に差異が生じたのではないかと考える。

以上より、諸司印の字形は細かく1・10と2～9と11・12の3種類に分けることができると言える。書風の違いで分けると1～10と11・12の2種類に分けることができる。1～10は線が細く曲線的で統一感があるように見え、「天皇御璽」にも通ずるものがある。11・12は直線的で印面内の白が多く、硬さがあることによって拙い印象を持たせることが分かった。

続いて諸国印の特徴を考える。諸国印の4「摂津国印」(35ページ図4 1)と23「但馬国印」(35ページ図4 2)を見比べていくこととし、以下に一字ずつ切り抜いたものを掲載した。

	寸法	1 字目	2 字目	3 字目「国」	4 字目「印」
4 「摂津国印」	5. 8 センチ				
23 「但馬国印」	6. 0 センチ				

まず、諸国印として分類される印のすべてに共通する文字である「国印」から分析する。「国」字は32～33ページの表にある35顆すべて4「摂津国印」や23「但馬国印」の「国」と同じ字形をしている。どちらも篆書体ではなく楷書体で、「口」の2画目が「冂」のように撥ねていたり、払っている画があったりしている。内印や諸司印では主に小篆が用いられているため、諸国印においてはじめて楷書が用いられたのではないかと考えられる。しかし楷書体であっても、すべての点画が角張っているわけではなく、どこことなく丸みを帯びているように見える。4字目の「印」は「左京之印」(図4 0)の「印」字と似た形となっている。だが、「左京之印」よりも細く、より整った形をしている。「弓」のような形をしている部分の横線が等間隔に開いており、角の部分が筆で書いたように細かく太細がついているところが、「国」字と調和がとれている理由の1つではないかと思う。

次に「摂津国印」の「摂津」、「但馬国印」の「但馬」を見る。中でも面白いのが「摂」字である。へんである「扌」は篆書体であるのに、つくりの部分は楷書体で「日」と「耳」が2つになっている。「津」は少々形が異なっているが、篆書体を用いたと考えられる。また、「但」は篆書体だが、「日」の部分がまるで楷書で書いたように点画に隙間ができてい

る。「馬」は楷書体のように見える。このように文字によって篆書ではなく楷書を用いているものがある。これについて、私は当時中国から篆書体がうまく伝わっていなかったことが原因としてあるのではないかと考える。おそらく当時の日本では隋唐の律令下の印を基にして印が作製されたと考えられる。そのため印の製作者は篆書を用いて似たような印を作ろうと考えたが、現在のように辞書は存在していなかったため、苦肉の策で楷書を用いて何とか調和を取りながら印を作製したのではないかと想像する。字体が異なっているにもかかわらず、雰囲気が似るように工夫して文字を組み込んでいる点が、倭古印の特徴の1つであると思われる。

以上より諸国印は、篆書体や楷書体が混じっているながらも違和感がないように、篆書体の部分を少々硬めに、楷書体の部分をほんの少し丸みを帯びさせて柔らかめにするすることで、まとまりよく作られているものだということが分かった。このような調和のとり方が日本独特の印である所以ではないかと考える。

第3節 諸国印の比較からみる字体変遷

第1章第2節の諸国印について記載した項（10, 11 ページ）で、「山背国印」と「山城国印」、「大倭国印」と「大和国印」の書風に相違があることを述べた。この節では上記の4顆の書風にどのような違いがあるのかを比較検証し、諸国印から分かる倭古印の変遷を考える。

まず、4顆の印を以下に載せ、「山背国印」と「山城国印」、「大倭国印」と「大和国印」の二顆ずつに分けて比較する。便宜上、上記の4顆に（1）～（4）の番号を振っている。

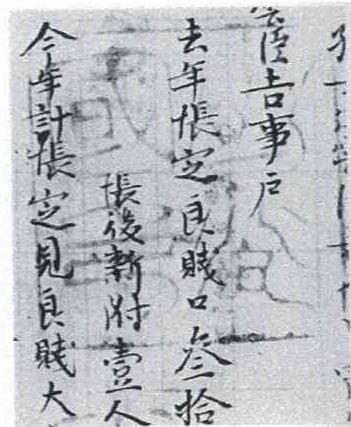
（1）「山背国印」

奈良時代、寸法5.9センチ

神亀3年『山背国愛宕郡雲上里・同雲下里計帳』、天平9年『山背国宇治郡売買地券』、同15年『弘福寺田数帳』、同20年『山背国解』『山背国宇治郡加美郷家地売券』に所載。



（原寸）（図43）



神亀3年『山背国愛宕郡雲上里計帳』

押印箇所

（縮小）

(2)「山城国印」

平安時代，寸法5.9センチ

延暦23年『東大寺家地相換券文』，承和8年『山城国宇治郡家地売買券』『石川宗益家地売券』，嘉祥2年『山城国宇治郡司解』，同3年『賀茂成継墾田売券』に所載。



(原寸) (図44)



嘉祥3年『賀茂成継墾田売券』
押印箇所 (縮小)

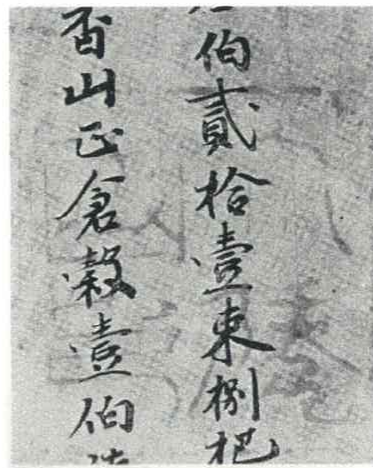
(3)「大倭国印」

奈良時代，寸法6.0センチ

天平2年『大倭国大税并神税帳』に所載。



(原寸) (図45)

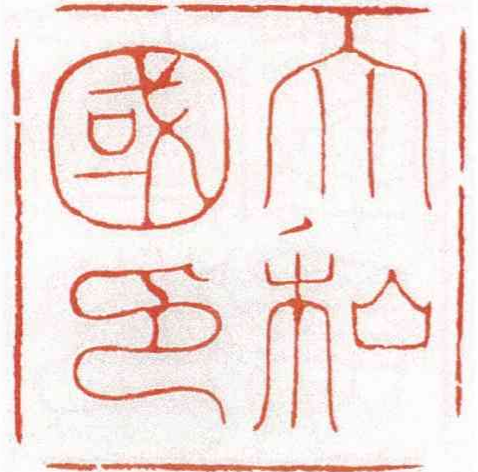


天平2年『大倭国大税并神税帳』
押印箇所 (縮小)

(4)「大和国印」

奈良時代，寸法6．0センチ

天平宝字5年『大和国十市郡池上郷屋地売買券』，宝龜8年『大和国解』，延暦7年・同8年『大和国添上郡司解』，同23年『東大寺家地相換券文』に所載。







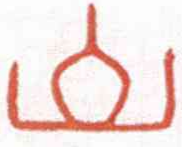



(原寸) (図46)



天平宝字5年『大和国十市郡池上郷屋地売買券』
押印箇所 (縮小)

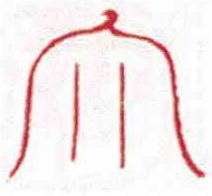



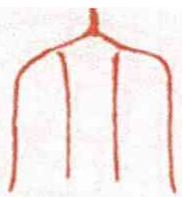
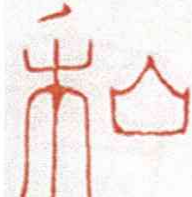


最初に(1)「山背国印」(図43)と(2)「山城国印」(図44)の比較から行う。2顆の寸法については，どちらも5．9センチであり，諸国印の規定に沿って作成されていることが分かる。印面全体から(1)と(2)を比較すると，最初に目につくのは線の太さである。(1)が細めであるのに対し，(2)はその倍近くの太さになっている。また(1)は印面を4等分してみると，まるで半紙に4字書きをしたような，1文字当たりの空間がほぼ同じであることから，文字の大きさも揃っているように見える。しかし(2)は文字の画数に合わせて，画数の少ない「山」よりも「城」や「国」が大きく書かれている。特に「国」はくにがまえにより周りが囲われた文字のため，際立って大きく見える。「山」と「城」の間に大きな隙間も生じていることから，字の収め方としては(1)の方がより整って作られていることが分かる。

次に細かい字形の比較をする。次ページの表は，(1)と(2)から1字ずつ文字を切り抜いて対応させたものである。

	山	背・城	国	印
(1) 「山背国印」				
(2) 「山城国印」				

1字目の「山」は(1)が直線的であるのに対し、(2)は曲線的に見える。これは「山」の1画目の縦線の在り方が影響していると考えられる。(1)は「人」のような形で二股になっており、空間が三角形に近い形をしている。対して(2)は直線が別れたところから弧を描いて下の横線と接しており、円形に近い空間の取り方となっている。また(1)は定規で線を引くような斜めの線を書くことで鋭さを持たせながらも、一番右の縦画の最後を丸くすることで、柔らかみも感じさせるようにできている。(2)は横線が平行、縦線がほぼ垂直に書かれているところから、(1)よりも篆書を意識させるものになっているように感じられる。これは2文字目以降も同様で、(1)よりも(2)のほうがより正確な篆書を用いているのではないかと考えられる。(1)では2字目の「背」が楷書体を無理やり篆書に近づけようとしたような不思議な形になっていたり、3字目の「国」がほぼ楷書体で書かれていたりする。4字目の「印」は筆で書いたようなはらいや折れになっている。(2)は「国」のくにくにがまえに丸みがあり、(1)のような折れはない。「印」も弧を描いたように曲りが続いている。このことから、(1)のような楷書や篆書が入り混じった、少々硬めの字形を用いた印から、(2)のような丸みを帯びた篆書を用いた印へと変化していったと思われる。(1)の神亀3年(726)から(2)の延暦23年(804)で78年経過しているため、その間にさらに中国の文字や文化を学んだのではないかと考えられ、印にも影響が現れたのではないかと考えられる。

続いて(3)「大倭国印」(図45)と(4)「大和国印」(図46)の比較をする。(3)は天平2年(730)、(4)は天平宝字5年(761)ということから、国名表記の変更によりおよそ30年後に改鑄されたことが言える。寸法はどちらも6.0センチである。文字の太細にほとんど変化はなく、辺縁も四方が欠けているところがよく似ている。1字目の「大」の字形はよく似ているが、「国印」の字形に大きな変化が見られる。字形比較のため、次ページに表を載せた。

	大	倭・和	国	印
(3) 「大倭国印」				
(4) 「大和国印」				

(3)と(4)の「国印」を比較すると、(3)は第2章第2節 37・38 ページでも分析した通り、楷書体で点画がはっきりと分かるような字形である。(4)は丸みが強調された篆書体となり、横画が少々右上がりだが点画の強調は見られず、(2)「山城国印」と似たような字形になっていることが分かる。年月としては、(1)と(2)の半分ほどだが、既に字形の変化が現れていたと考えられる。しかし(2)2字目の「和」の1画目が筆で書いたようなはらいがあるところから、(3)の頃の名残があるのも分かる。

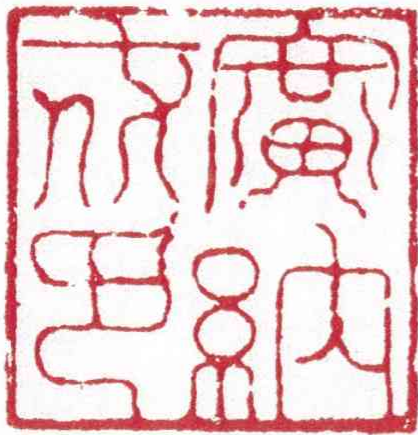
(1)～(4)の印は時系列で並べると、(1)(3)(4)(2)となる。(1)と(3)の年月間は4年と短いことと書風・字形がよく似ていることから、ほぼ同時期に作られたものだと考えられる。

以上、4顆の比較を通して、諸国印の字体は楷書と篆書が混じった不思議な印から篆書のみを用いた印へと変化し、徐々に太さが増していったことが分かる。これについて、推測にはなるが、(1)や(3)の時には参考となる中国の隋・唐時代の印譜の数が少なく、篆書体が分からない文字を何とかして印に組み込もうとしたため、結果として楷書と篆書が混じった印が出来上がったのではないかと思う。(4)や(2)と年月が経つにつれ、遣唐使による中国との交流によって手に入れた印譜や原印が増えたことに加え、篆書体に関する知識を身につけることができ、印にも反映することが出来たのだろうと想像する。また、楷書を用いたことで少々硬さが残った印であったものが、丸みが目立つ印へと変化していったことも分かった。しかし時代を経るにつれて細部への配慮が徐々に薄れていき、(1)や(3)のような格調高く調和の取れた印の良さを失ってしまったように感じた。

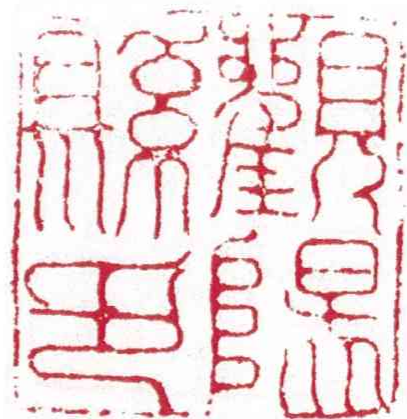
第4節 倭古印と隋唐印の比較

倭古印が襲用されていた奈良・平安時代は、中国は唐時代であり、隋時代から続く印制の下、朱文印が用いられていた。この印を俗に隋唐印と呼ぶ。隋唐印は中国での印制が大転換した時期にあたるものである。隋以前は封泥に用いたため白文印だったものが、六朝末期に紙上に朱で印することが始まったことにより、使用の便宜上朱文印に一変した。この朱文印は官署印である。隋唐印の様式をそのまま踏襲したものが倭古印だと言われている。よって倭古印と隋唐印は制度だけでなく字体も近いものではないかと考える。この考えが正しいのか、倭古印の官印と隋唐印を比較して検証する。以下に現存する隋唐印の図版を載せる。年代の分かるものは一緒に記載した。

○隋印



「廣納府印」開皇16年（596）
（原寸）（図47）



「觀陽県印」開皇16年（596）
（原寸）（図48）

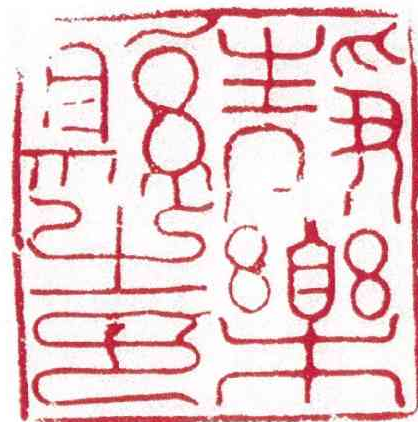


「崇信府印」大業11年（615）
（原寸）（図49）

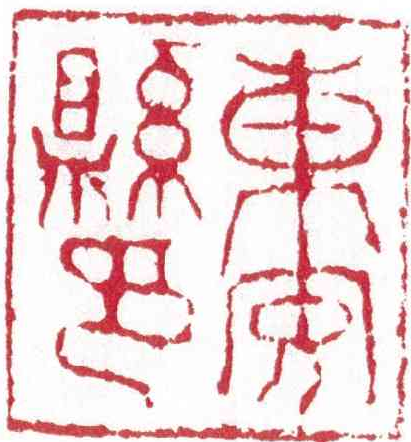
○唐印



「齋王國司印」(原寸)(図50)



「静楽県之印」(原寸)(図51)



「東安県印」(原寸)(図52)



「憂県印」(原寸)(図53)

以上7顆の隋唐印を見比べると、隋・唐時代での大きな字体の変化はなく、篆書体が用いられていたことが分かる。ただ、隋時代では4文字印のみが襲用されていたと考えられるのに対し、唐時代では3文字印や5文字印も現れていることから、県名などによって文字配列に変化があったのだろうと考えられる。その文字配列は大雑把で、少々稚拙な印象を持つ。字形は丸みの帯びたものとなっている。

第2章第1節～第3節で分析してきた、日本の官印である内印「天皇御璽」(6ページ図1・2), 諸司印「中務之印」(10ページ図5), 「式部之印」(10ページ図6), 「治部之印」(33ページ図37), 「兵部之印」(34ページ図38), 「内侍之印」(34ページ図39), 諸国印「山背国印」(38ページ図43), 「大倭国印」(39ページ図45)などと比較すると、倭古印の官印はすべて4文字印となっているところから、文字配列に関しては隋時代の印を参考にしていただのではないかと推測できる。また倭古印と隋唐印では、線の太さや篆書の形、大きさが似通っているところもあることから、やはり倭古印は隋唐印の字形や印の持つ雰囲気を読んで作製されたのだと感じられる。しかし倭古印には篆書体のみで構成さ

れた隋唐印には見られなかった、楷書体を混ぜ込んだ印があることから、隋唐印を基にしながらも日本独自の変化が現れていたと考えられる。加えて、倭古印は隋唐印よりも細部にわたって緻密に作られているように見えることが、倭古印の良さであるとも考える。

よって倭古印は隋唐印を基に作製されただろうが、隋唐印の形式や字体、字形などをそのまま用いるのではなく、楷書体を入れつつも篆書体と調和をとったような日本独自のものを作製したことが分かった。これが印の和様化であると考えられ、書でも中国から学んだ漢字を基礎として仮名文字が現れていったように、印も日本で独自に変化していく原点として倭古印が位置づけられるのではないかと考えた。

第3章 近現代篆刻家・金工家による倭古印体を用いた篆刻での表現方法

日本での篆刻は平安時代後期に官印の制度が衰微し、花押³⁶を用いた時代を迎えたことによって一時衰退した。中国明時代に興った篆刻が、17世紀の中葉、獨立・心越の渡来によって初めて日本に伝えられ、日本でも篆刻が行われるようになった。18世紀の中頃、中国の古印や明末名家の印が認識されるようになり、さらに高芙蓉³⁷の出現は一期を画し、印聖と呼ばれて永く日本篆刻の主流となった。明治以降、中国の古印や清朝名家と直結した新風が興り、現代に至る。こういった流れから、日本近現代の篆刻は再び中国のものが元となり、倭古印のような和様の印はあまり作られていない。しかし数少ないながらも、倭古印の風趣を取り入れた作品が残されているため、この節では近現代篆刻家・金工家の作品から倭古印体を用いた篆刻での表現方法を考えていく。以下は倭古印風の作品を残している篆刻家・金工家の紹介とその印影である。製作年が分かる印はその年を記載した。印影を観察して分かったことも書き添えておく。

○濱村藏六（5世）

慶応2年（1866）～明治42年（1909）。名は裕、字は有孚・無咎、津軽の人三谷大足の子。はじめ篆刻は金子簑香³⁸につき、次いで4世藏六³⁹に学ぶ。家学によって巧緻の技を誇ったが、後に秦漢の古印・金文・瓦罍⁴⁰に倣い、近くは呉昌碩⁴¹に心酔した。鑄印・陶印を得意とする。



「彌彦山廟」（原寸）（図54）

「山」字が諸国印の「山背国印」（38ページ図43）のそれに近い字形をしている。線に柔らかさがあり、官印よりは公私印の雰囲気に近いものであるように感じられる。

○河井荃廬

明治4年（1871）～昭和20年（1945）。名は得、後に仙郎と改め、荃廬と号した。京都の人。少時篠田芥津⁴²について篆刻を学び、ついで呉昌碩に従学する傍ら秦漢の古典、鄧派⁴³の新風を融会して渾厚清超の作風を樹立した。



「熊谷家印」明治24年（原寸）（図55）

今わかっている範囲での河井荃廬の最初の作品だと言われるものである。楷書体で、官印の字形や書風とは違うが、平安時代以降の私印に近い字形で丸みのある線をしているように感じる。

○石井雙石

明治6年（1873）～昭和46年（1971）。名は碩，字は子寛，号は雙石，千葉の人。濱村藏六に師事し篆刻に志した。中国の古印や趙之謙⁴⁴に力を得て精嚴な刻風をたてたが，戦後は一転して奔逸な表現を好み，90歳を超えてなお奏刀し，篆仙と称せられた。



「鈍鳥逆風」（原寸）（図56）

楷書体で作られている。特に文字のはねの部分が「東厩私印」（20ページ図26）に近い形をしており，印の雰囲気も似ている。

○香取秀真

明治7年（1874）～昭和29年（1954）。千葉生まれ。名は秀治郎。金工家として古典的な著作を発表，鑄金，工芸界の重鎮として活躍した。諸寺の梵鐘を鑄造し，また倭古印の模作に励み，自らも好んで銅印を鑄した。



銅印「安比津」（原寸）（図57）

会津八一の用印の1つである。鑄銅印であるため，倭古印に近い味わいが出ている。字形は楷書と行書の間にあるようなものとなっており，倭古印にヒントを得て作られているように見える。

○楠瀬日年

明治21年（1888）～昭和37年（1962）。土佐生まれ。大正初期より章炳麟に説文を習うため度々来中。たまたま呉昌碩に会し篆刻を問う。以降篆刻を専らとする。



銅印「永平寺印」(縮小)(図58)

寺社・寺院印といった公印の字形や線質によく似ている。篆書・隸書・楷書を用いているが違和感なく調和しているように見える。



陶印「健」(原寸)(図59)

倭古印の時代より少々下り、鎌倉時代以降の私印に似ている。楷書体が用いられている。楷書のため少々字形に硬さがあるような感じである。

○曾田富康

明治34年(1901)～昭和62年(1987)。千葉館山生まれ。鑄金作家。日本古印についての研究をまとめ、「日本古印新攷」と題し刊行。古印の模作に優れ、倭古印研究家としても知られる。



銅印「朔」(原寸)(図60)

どちらも会津八一の用印である。鑄造印であり、鎌倉・室町時代の私印(1字印)によく似た字形、雰囲気がある。



銅印「朔」(原寸)(図61)

○内藤香石

明治41年(1908)～昭和61年(1986)。山梨県生まれ。田口米舩⁴⁵に篆刻の魅力を知らされ、20歳の頃石井雙石の門に入る。趙之謙の書・画・篆刻に惹かれ、模刻臨書を繰り返し、後の印風の基礎となった。石井雙石門の重鎮として知られる。



「西光教院」(原寸)(図62)

全ての文字に楷書体が用いられた印である。線質・辺縁の丸みなどが倭古印に近い。雰囲気は参考にされていると思うが、倭古印から字形を参考にしたものではないように考えられる。

○小林斗盒

大正5年(1916)～平成19年(2007)。埼玉県生まれ。10歳の頃より父香坡の指導で篆刻を始める。17歳の頃石井雙石の門に入る。その後河井荃廬に師事し、篆刻・書・画にわたって教えを受けた。書を西川寧⁴⁶に学ぶ。カミソリのような尖鋭な刀法を駆使した緻密な作風で知られる。



石印「法善寺印」平成14年(原寸)(図63)

「善」字が私印「積善藤家」(19ページ図20)の「善」をもとにして作製されたと考えられる。篆書体が用いられているが、線質が倭古印に近い。

ここまで近現代篆刻家・金工家の作品を見てきたが、倭古印の官印を参考にした作品はほとんど作られておらず、公私印の雰囲気に近い作品のほうが多かった。取り上げた篆刻家は趙之謙や呉昌碩などといった清代篆刻家の刻風をもとにした印を主とした方が多く、寺社などの要望などに応じて倭古印風の印を作製したと考えられるため、1・2顆のみその姿が見られるのだと思われる。倭古印を良く学んだとされるのは金工家の香取秀真だといわれており、そのほかに名前の挙がる人物はいない。香取秀真は金工家のため、倭古印と同じく銅印を作製しており、篆刻で表現したわけではない。おそらく倭古印風の印を作ったとしてもその字形や書風によって使用の幅が限られ、書画に押すものとして倭古印風の印は需要がなかったと考えられるため、作製数も少ないのだろうと推測する。また、近現代では中国の古印や清朝名家の作品に目が向けられ学ばれたことから、古くに作られた

日本の印の存在が蔑ろにされていた可能性もあると考えられる。その他倭古印はその数自体が多く残されておらず、原印や印譜を目にすることも少なかったことや、扱われている文字にも限りがあり、字形の参考になるものも少なかったこと、官・公・私印で字形や書風が大きく異なることが篆刻に応用するところの障害になったのではないかと考える。今後は日本でも古くから倭古印と呼ばれる印を用いていたという事実を知るだけでなく、私自身が倭古印の字形や書風により目を向け、実際に作製しながら篆刻でどのように表現するかを考えていくべきだと強く感じた。

第4章 倭古印の教育的価値

現在、高等学校芸術科書道で篆刻の学習は、どの学年の教科書にも必ず組み込まれている。しかし、教科書内の篆刻に関するページは驚くほど少ない。その中で倭古印が載せられているものはごくわずかである。数少ない倭古印が教科書ではどう扱われているのか、現行の教科書を見て考えていく。また、今後の高等学校書道教育に於いて倭古印をどのように取り入れると良いかも合わせて考える。今回比較に使用した教科書は、東京書籍・教育図書・教育出版・光村図書の4社のもので、書道Ⅰから書道Ⅲまですべて目を通した。以下は篆刻に充てられたページ数と倭古印の有無、記載内容を表にしたものである。

会社	教科書	ページ数	有無	記載内容
東京書籍	書道Ⅰ	4 (p104～107)	○	104 篆刻とは、篆刻の用具用材、創作の手順について。 105 創作の手順 布字についての詳しい説明。 106 創作の手順 運刀～補刀・完成まで。 107 創作参考作品 倭古印の「鶴寺倉印」を原寸大で紹介。 説明はなし。(図6 4) 発泡スチロール印の作り方の紹介。
	書道Ⅱ	5 (p54～58)	○	54 篆刻の歴史と用法。倭古印「法隆寺印」の図版を原寸大で紹介。倭古印に関する説明の記述はなし。(図6 5) 55 押印・発表の方法、生活の中の印について。 56, 57 書道Ⅰのおさらいで創作の手順を載せる。 58 近現代中国・日本の篆刻家による創作作品の紹介。
	書道Ⅲ	3 (p56～58)	×	56 成語印資料(小篆・印篆・金文・古)の紹介、大印の彫り方について。 57 成語印資料の続き、成語例、側款の彫り方について。 58 創作参考作品の紹介、押印の方法について。
教育図書	書Ⅰ	4 (p62～65)	×	62 印の種類、各時代の印の紹介。篆刻について文章での解説。 63 落款と雅印について。 64, 65 篆刻の準備と手順について。参考作品(漢印・中国と日本の近現代篆刻家の作品)の紹介。
	書Ⅱ	4 (p18～21)	○	18, 19 中国と日本の印の紹介。日本の古印として「静神宮印」が紹介されている。(図6 6) 印の歴史について。日本について記載あり。※1 20, 21 篆刻の準備と手順、漢印の鑑賞。
	書Ⅲ	2 (p48, 49)	×	48 文章による篆刻作品についての説明。 49 中国・日本の篆刻家による作品の紹介。

会社	教科書	ページ 数	有 無	記載内容
教育出版	書道Ⅰ	5 (p60～ 64)	×	60 文章による篆刻についての説明。 61 篆刻の用具用材, 姓名印と文字の配列, 印稿の例について。 62, 63 篆刻の手順について。 64 印の紹介 (作例と中国近代篆刻家の作品), 小篆と印篆について。
	書道Ⅱ	4 (p16～ 19)	○	16 印の歴史, 倭古印の説明と縮小印影「尊勝院印」あり。(図67) ※2 17 印の章法について。 18, 19 篆刻の手順。(書道Ⅰのおさらい)
	書道Ⅲ	2 (p32, 33)	×	32, 33 いろいろな種類の印について。中国古代～近現代の印と日本の近現代篆刻家の印を載せる。
光村図書	書Ⅰ	4 (p112 ～115)	×	112 初世中村蘭台の作品「豪楓関」を載せる。 113 印の名称, 篆刻の用具用材について。 114, 115 篆刻の手順について。
	書Ⅱ	4 (p68～ 71)	○	68 「多宝塔碑」法帖内の印の紹介。印の歴史について。 69 篆刻作品の紹介。印の歴史の続き。倭古印の記載, 「鵜寺倉印」あり。(図68) ※3 70, 71 姓名印の作成手順。
	書Ⅲ	2 (p50, 51)	×	50, 51 中国・日本の近現代篆刻家の作品 (日本の篆刻家に比重を置く), 印材について。

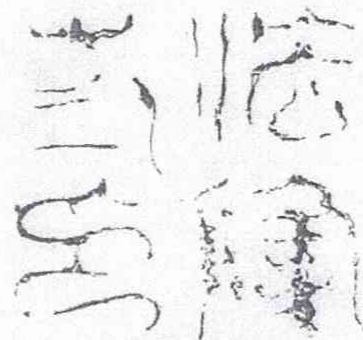
表内の※は教科書内の文章で倭古印が触れられているものにつけた。

- ※1 19 ページ「印の歴史」7～13行目に「わが国では, 奈良, 平安時代の頃から, 隋・唐時代の様式に従いながらも, 素朴で温雅な印を育み, 後世, 大和古印として親しまれました。」と書かれている。
- ※2 16 ページ「印の歴史 (中国・日本)」18～20行目に「日本で印が作られ始めたのは奈良時代からであり, 隋・唐の印を模倣して作られた。奈良・平安時代が最盛期で, この頃作られたものを「大和古印」と呼んでいる。」と書かれている。
- ※3 69 ページ「印の歴史」の文章内に「隋代から唐代にかけて作られた大型の朱文印は, 日本の倭古印にも影響を与えた。」と書かれている。



⑦
大和古印
平安時代
鶴寺倉印

東京書籍『書道Ⅰ』「鶴寺倉印」
(部分縮小) (図64)



倭古印(法隆寺印)

東京書籍『書道Ⅱ』「法隆寺印」
(部分縮小) (図65)



静神宮印

●日本の古印と近代印人の印
大和古印

初世

教育図書『書道Ⅱ』「静神宮印」
(部分縮小) (図66)



尊勝院印
(大和古印・縮小)

教育出版『書道Ⅱ』「尊勝院印」
(部分拡大) (図67)

明・清代には篆書などの



大和古印

光村図書『書道Ⅱ』「鶴寺倉印」
(部分拡大) (図68)

全12冊の教科書内で倭古印の印影を取り上げていたものは5冊のみであった。各社必ず倭古印を1顆は載せていることが分かった。取り上げられた倭古印の印影は公印か私印であり、官印を載せているものはなかった。また、倭古印について文章内で説明があったものはさらに少なく3冊であった。東京書籍は書道Ⅰ・Ⅱと2冊に印影が載せられていたが、倭古印がどのような印であるかについては記載されていなかった。どの教科書でも中心に取り上げられていたものは、中国清代の篆刻家や日本近現代の篆刻家である。このことから、倭古印は篆刻学習において軽視されていることが分かる。私はその理由として、①倭古印が広く知られているものではないこと、②倭古印には鋳銅された銅印が多いこと、③印によって書体や字形がばらばらであること、④倭古印をもとに作製された印が少ないことの4点が挙げられると考える。

まず①について、高等学校で書道を教える立場の教師でも、漢字・仮名・篆刻など得意とするものが違い、理解度にも差がある。教師の中では倭古印についてまったく知らない人もいるだろう。そのような教師が倭古印を生徒に教えることは厳しいだろうと考えられるからである。次に②について、篆刻学習では石に彫ることが目的とされており、銅を鋳造して作る印とは作り方が違う。同じように石に彫られた近現代篆刻家の作品のほうが創作活動で参考にする上で向いていると考えられるからである。③について、倭古印は官・公・私印で大きく書体や字形が異なっている。第2章でも分析した通り、さらに同じ官印でも内印・諸司印・諸国印の違いや時代によって字形も異なる。倭古印には印篆や小篆のように統一された書体を用いているとは言えないし、広く普及している辞書もない。初めて篆刻をする高校生にとって辞書がないことは、早くも印稿作りの時点で躓くことになる。統一された書体を使う方が、学習する上でも教育する上でも手軽で都合がいいということも言えるからである。最後に④について、第3章(46ページ)でも扱ったが、日本の近現代篆刻家で倭古印を主として学んだ者はいない。倭古印には系統性がなく、半ばで一度途絶えてしまった点が影響し、近現代で参考にできるものが少ないから教育に取り入れにくいのではないかと考えられる。

以上4点の理由から、倭古印が取り入れられないのだと考えられるが、日本の書道教育で日本での印文化の始まりである倭古印を教育で扱わないままでいいのだろうかと思う。倭古印について知るということは、仮名のように篆刻でも日本独自の文化が築かれていたことを知ることにもつながる。作風を篆刻に取り入れるには課題が多すぎて厳しいだろうが、印の歴史について学習する点で倭古印を大きく扱ってもよいと考える。また、印の歴史のほとんどを中国の歴史で占めるのではなく、日本の流れも多く扱い、自国の伝統文化について学ぶ機会を、これからの書道教育で扱っていくことが重要なのではないかと考えた。

おわりに

倭古印を研究していくにつれて、倭古印と呼ばれる印が作られるに至った背景を詳しく知ることができ、一言に倭古印と言っても、「官印」「公印」「私印」で大きく作風が異なり、官印の中でもさらに細かく字形や書風に違いがあることを知ることができた。特に第2章第2・3節で諸国印の分析を行って、初期の楷書と篆書が混じった不思議な印から徐々に篆書のみを用いた印に変化していったことに気付くことができた。研究する前の私は中国隋唐印の書体や字形を真似ていたとしたら、篆書のみを用いていたところに楷書を交えて和様化させていったのではないかと考えていたため、逆の流れで成立していたことに驚きを感じた。諸国印の初期のもののように、試行錯誤の痕が日本独特の雰囲気醸し出しているような印のほうが、倭古印らしさがあるのではないかと考える。

第3章で日本近現代の篆刻家・金工家の作品について取り上げたが、予想よりも倭古印風の作品数がかなり少なかった。これは倭古印の作風にあまり需要がなかったことを表しているのだと思う。書画に押す印としては不向きかもしれないが、作品化すると面白い印ができると思うので、私が倭古印の風趣を用いた篆刻作品を、今後の創作活動で多く行っていこうと決心することができた。

また、教科書比較を行うことで、倭古印を篆刻の学習で扱う難しさを知ることができた。しかし伝統文化についての学習が推奨されるようになった今、日本で最初に作られていた倭古印をほとんど学習しないのは勿体ないことだと考える。近現代の篆刻家が中国の古印や清代篆刻家に則った印を作ってきた背景があるため、篆刻をする上で流れの途絶えた倭古印の書体や字形を取り入れることは難しいが、日本で生活し、書道教育を行っていく以上、印の歴史として日本の印章の流れも多く取り入れるべきではないかと考えた。

今回の研究は官印に焦点を当てて行ってきたため、公私印の分析までは行うことができなかった。公私印は、制度に沿って丁寧に作製された官印とは異なり、多種多様のものとなっており、官印とはまた違った面白さがあると思う。今後は公私印にも目を向けてその作風を分析していきたい。また、倭古印体を用いた篆刻方法を確立するには、今まで彫ってきた印の数も実力も不足すぎていると感じる。今後さらに精力をかけて篆刻に励み、自分自身の作風を確立することを目標にしていきたいと思う。

最後に、日頃からご指導いただいている先生方、励ましてくれた仲間たちに深く感謝の意を表し、これを締めくくることとする。

注

- 1 『後漢書』…後漢一代を紀伝体で叙述した中国正史の1つ。南朝宋の^{はんよう}范曄（398～445）が編纂した。120巻からなり、東夷伝の中に、倭の奴国が光武帝から金印を賜ったとの記述がある。
- 2 中国でまだ紙が発明される以前…後漢の官吏であった蔡倫が発明したと伝えられていたが、前漢期遺跡から古紙が出土し、前漢初期の発明とされる。
- 3 木牘…木の札。中国で紙が普及する以前に用いられた書写材料。
- 4 竹簡…古代中国で書写に用いられた長さ20～30センチ、幅1～2センチ程度の竹片。
- 5 封泥…文書や器物を入れた袋や箱にかけたひも類を封緘するためにつけた粘土塊。官印や私印を押す。
- 6 陰刻…文字または絵画をくぼませて彫り込むこと。
- 7 『魏志倭人伝』…日本古代に関する中国の正史の1つで、晋の陳寿が撰した『三国志』の中の『魏志』30巻、東夷伝にある倭人の条の通称。
- 8 官印…官庁または官吏が職務上に使用する印。
- 9 『日本書紀』…六国史の1つ。30巻。養老4年（720）舎人親王らの撰。奈良時代に完成した日本最古の勅撰の正史。神代から持統天皇までの朝廷に伝わった神話・伝説・記録などを修飾の多い漢文で記述した編年体の史書。
- 10 大宝令…11巻からなる古代の法典。大宝元年（701）刑部親王・藤原不比等ら編。
- 11 公式令…律令の内、古文書の書式について定めた令。
- 12 養老令…10巻からなる古代の法典。養老2年（718）藤原不比等らが編纂を開始、天平宝字元年（757）藤原仲麻呂の提案で施行。大宝令とほとんど同文。
- 13 駅鈴伝符…律令制で、官人（駅使）の公務出張に際し、朝廷から支給した鈴を振り鳴らしたことを伝えた符のこと。
- 14 陽刻…浮彫りの印刻。文字その他図柄を高く、地を低くなるように彫刻したもの。
- 15 『延喜式』…弘仁式・貞観式の後をうけて編修された律令の施行細則。平安初期の禁中の年中儀式や制度などを漢文で記す。50巻。藤原時平・紀長谷雄・三善清行らが勅を受け、時平の没後、忠平が業を継ぎ、延長5年（927）撰進。康保4年（967）施行。
- 16 鈕…印または鏡などのつまみ。
- 17 印綬…身分や位階をあらわす官印を身につけるための組みひも。
- 18 国造…古代の世襲の地方官。
- 19 続日本紀…六国史の1つ。40巻。日本書紀の後を受け、文武天皇（697）から桓武天皇（791）までの編年体の史書。藤原継縄・菅野真道らが桓武天皇の勅を奉じて延暦16年（797）年撰進。
- 20 藤原仲麻呂…慶雲3年（706）～天平宝字8年（764）奈良時代の廷臣。武智麻呂の子。光明皇后・孝謙天皇に信頼されて紫微内相となり橘奈良麻呂ら反対派を倒して政

権を掌握。淳仁天皇になると、官制を改め右大臣となり、恵美押勝と改名して大師正一位に進んだ。

- 21 光明皇后…聖武天皇の皇后。藤原安宿媛^{あすかべひめ}。不比等の娘。孝謙天皇の母。仏教をあつく信じ、悲田院・施薬院を設けて窮民を救った。
- 22 酒人内親王…天平勝宝6年（754）～天長6年（829）光仁天皇の皇女。母は井上内親王。伊勢斎王、のち桓武天皇妃。
- 23 搨模…双鉤填墨。写そうとする文字の上に薄い紙を載せて謄写するもので、最初に輪郭だけを線で写し、中に墨を補填する方法をいう。
- 24 考証学…中国清代に栄えた実証的な学風・学問。経書などの古典を献学的・実証的に研究する。
- 25 重模…搨模されたものをさらに重ねて写し取ること。
- 26 藤原貞幹…享保17年（1732）～寛政9年（1797）考証学者。字は子冬。通称は叔蔵。号は無仏斎、好古。京都の僧家の出身。18歳で還俗。儒学、国学、有職、故実に精通し、とくに各地の金石文、古文書などを実地に研究。『衝口発』『古瓦譜』などをあらわした。
- 27 穂井田忠友…寛政3年（1791）～弘化4年（1847）国学者・考古学者。三河の人。大坂生玉神社社司穂井田氏を継ぐ。平田篤胤の門に入り、上京して西洋医術も学ぶ。奈良奉行梶野良材に仕え、天保7年（1836）正倉院開封の際、古物・古文書の整理をし、『正倉院文書』45巻を編んだ。
- 28 松平定信…宝暦8年（1758）～文政12年（1829）江戸最後の幕府老中。三卿の田安宗武の子。奥州白河の藩主。老中の職に就き寛政の改革を断行。また和歌・絵画に長じ、『花月草紙』『宇下人言』『集古十種』などの編著がある。
- 29 長谷川延年…享和3年（1803）～明治20年（1887）随筆家・目録家・篆刻家。道教を信仰し伝来する經典を涉獵、模刻して施本した。『見聞雑録』『博愛堂集古印譜』などの編著がある。
- 30 臨模…手本や原本を見ながら書いたり敷き写ししたりすること。
- 31 伝模…伝えられたものを写し取ること。
- 32 小曾根乾堂…文政11年（1828）～明治18年（1885）事業家・書家・文人画家・篆刻家。幼名を六郎太、六朗。諱を豊明、字を守辱、乾堂は号で室号を鎮鼎山房・浪平釣叟とした。通称は栄。長崎の人。明治政府の勅命により御璽・国璽を刻したことで知られる。
- 33 安部井櫟堂…文化5年（1808）～明治16年（1883）名は ，字は大介。音門と称し、後音人と改めた。号は櫟堂・芥舟。本姓は岡。安部井と称した。印譜に『平安名家印譜』『鐵如意印譜』『櫟堂印譜』がある。命を受けて孝明天皇の水晶の御璽を刻し、印司に任ぜられた。
- 34 秦藏六…文政6年（1823）～明治23年（1890）鋳金家。山城出身。初名は米

- 蔵。蠟型鑄造を得意とし中国古銅器の模作で知られた。孝明天皇の銅印、将軍徳川慶喜の征夷大將軍の金印をつくり、明治天皇の御璽・国璽を鑄造した。代表作に「鼎形花瓶」。
- 35 辰砂…水銀と硫黄の化合物。深紅色の六方晶系の鉱物。塊状で産出することが多い。
- 36 花押…署名の下に書く判。はじめは名を楷書体で自著したが、次第に草書体で書いた草名となり、さらに様式化したものが花押である。
- 37 高芙蓉…享保7年（1722）～天明4年（1784）名は孟彪，字を孺皮，号は芙蓉，姓は源・大島氏，その他に三嶽道者・中嶽画史・氷壑山人・富岷山房など。甲斐高梨の人。詩書画印をよくし鑑識故実に精しかった。篆刻は特に優れ，気韻の高い作風をたてた。印聖と仰がれる。
- 38 金子簞香…文化12年（1815）～明治25年（1892）篆刻家。名は好爵，字。字(あざな)は麋之，魚吉。通称は与一。幕府の先手与力。書にすぐれ，将軍や天皇，皇后の印章をつくった。
- 39 4 世藏六…文政9年（1826）～明治28年（1895），篆刻家。名は觀侯，字は澥，薇山・雨村と号し，大澥と称した。備州吉備の人で本姓鹽見參藏。70歳で没した。
- 40 瓦罍…軒丸瓦の先端の部分。
- 41 呉昌碩…道光24年（1844）～民国16年（1927）初め名は俊のちに俊卿，字は倉石・昌碩，号は缶廬・苦鉄・破荷。浙江安吉の人。はじめ篆刻をもって著われたが，中年画に志し書は石鼓を専攻した。詩文書画を兼ねよくした近代第一の名手である。
- 42 篠田芥津…文政10年（1827）～明治35年（1902）篆刻家。名は徳。字は直心。美濃の人。40歳のころ江戸にでて篆刻の技を磨く。のち京都に住み，中国篆刻の浙派の新風を導入。晩年，諸名家の印章を集めた『一日六時恒吉祥草堂印譜』を作った。
- 43 鄧派…鄧石如の弟子や，作風に学んだ名手の総称。鄧石如（1743～1805）は清代の傑出した篆刻家の1人，碑学派の開祖。
- 44 趙之謙…道光9年～光緒10年（1829～1884）、浙江会稽の人。早くから金石の学に親しみ、印は浙派から鄧派に転じ、あらゆる金石の素材を駆使して斬新な刻風を樹立した。書ははじめ顔法を学んだが、北碑との邂逅は彼の琴線をかきたて、世に北魏書といわれる新様を創造した。
- 45 田口米舫…文久元年（1861）～昭和5年（1930）書家。本名は茂一郎。字は子寿。別号に蘇山外史・姑蘇仏龕主人。田口和美の子。栃木下野出身。金石学，仏典を学び，清で3年間書道を研究。のち日本書道作振会審査員を務めた。
- 46 西川寧…明治35年（1902）～平成元年（1989）書家・書法学者。字は安叔，号は靖庵。書家春洞の長男として東京・向島に生まれる。幼年より書に親しみ，慶応義塾大学で中国文学を専攻，のち河井荃廬に師事。中国文学および金石学，中国書法を研究。六朝書の北碑に傾倒し，これを根底に現代感覚を加味した書風を創始した。また篆刻をよくし，文人画にも長ずる。中国書道全般に関する深い造詣と学識により高い評価を得た。『六朝の書道』『書の変相』など多くの著書がある。

図版参照ページ

- | | |
|---------------------------|-------------------------|
| 1, 「漢委奴国王」 後漢 | 『教育出版 書道 I』 110 ページ |
| 2, 「天皇御璽」 天平感宝元年 | 『日本の官印』 1 ページ |
| 3, 「天皇御璽」 天平勝宝 8 歳 | 『日本の官印』 2 ページ |
| 4, 「太政官印」 延暦 2 年 | 『日本の官印』 7 ページ |
| 5, 「中務之印」 天平 1 7 年 | 『日本の官印』 10 ページ |
| 6, 「式部之印」 天平 1 7 年 | 『日本の官印』 11 ページ |
| 7, 「筑前国印」 大宝 2 年 | 『日本の官印』 45 ページ |
| 8, 「隱伎倉印」 奈良時代 | 『日本の官印』 66 ページ |
| 9, 「駿河倉印」 奈良時代 | 『日本の官印』 64 ページ |
| 1 0, 「十市郡印」 天平宝字 5 年 | 『日本の官印』 51 ページ |
| 1 1, 「坂井郡印」 天平宝字 2 年 | 『日本の官印』 55 ページ |
| 1 2, 「伊保郷印」 平安時代 | 『日本の官印』 72 ページ |
| 1 3, 「御笠団印」 奈良時代 | 『日本の官印』 68 ページ |
| 1 4, 「遠賀団印」 奈良時代 | 『日本の官印』 67 ページ |
| 1 5, 「因国師印」 天平神護元年 | 『日本の官印』 60 ページ |
| 1 6, 「僧綱之印」 延暦 2 3 年 | 『日本の官印』 60 ページ |
| 1 7, 「大神宮印」 平安時代 | 『日本の古印』 18, 19 ページ |
| 1 8, 「内宮政印」 平安時代 | 『日本の古印』 20, 21 ページ |
| 1 9, 「豊受宮印」 平安時代 | 『日本の古印』 22, 23 ページ |
| 2 0, 「積善藤家」 奈良時代 | 『書道全集 別巻 II』 21 ページ |
| 2 1, 「内家私印」 奈良時代 | 『書道全集 別巻 II』 3 ページ |
| 2 2, 「酒」 弘仁 9 年 | 『日本の古印』 123 ページ |
| 2 3, 「生江息嶋」 天平宝字 3 年 | 『日本の古印』 123 ページ |
| 2 4, 「鳥豊名印」 天平宝字 3 年 | 『書の日本史 第 9 巻』 186 ページ |
| 2 5, 「画師池守」 天平宝字 4 年 | 『書の日本史 第 9 巻』 186 ページ |
| 2 6, 「東廐私印」 奈良時代 | 『日本の古印』 65 ページ |
| 2 7, 「錦衣私印」 奈良時代 | 『日本の古印』 66 ページ |
| 2 8, 「私印」 平安時代 | 『日本の古印』 77 ページ |
| 2 9, 「華嚴供印」 鎌倉時代 | 『日本の古印』 103 ページ |
| 3 0, 「天皇御璽」 延長 5 年 | 『日本の官印』 3 ページ |
| 3 1, 「天皇御璽」 承安 2 年 | 『日本の官印』 4 ページ |
| 3 2, 「天皇御璽」 明和 4 年 | 『日本の官印』 5 ページ |
| 3 3, 「天皇御璽」 明治 4 年～明治 7 年 | 『日本の官印』 76 ページ |
| 3 4, 「天皇御璽」 明治 7 年～ | 『日本の官印』 77 ページ |
| 3 5, 「天皇御璽」 天平感宝元年 | 『原色日本の美術 第 22 巻』 21 ページ |

36, 「天皇御璽」天平勝宝8歳	『原色日本の美術 第22巻』22, 23 ページ
37, 「治部之印」天平17年	『日本の官印』11 ページ
38, 「兵部之印」天平17年	『日本の官印』12 ページ
39, 「内侍之印」天平8年	『日本の官印』15 ページ
40, 「左京之印」天平11年	『日本の官印』16 ページ
41, 「摂津国印」天平8年	『日本の官印』23 ページ
42, 「但馬国印」天平9年	『日本の官印』37 ページ
43, 「山背国印」神亀3年	『日本の官印』19 ページ
44, 「山城国印」嘉祥3年	『日本の官印』19 ページ
45, 「大倭国印」天平2年	『日本の官印』20 ページ
46, 「大和国印」天平宝字5年	『日本の官印』20 ページ
47, 「廣納府印」開皇16年	『篆刻全集3』9 ページ
48, 「觀陽縣印」開皇16年	『篆刻全集3』10 ページ
49, 「崇信府印」大業11年	『篆刻全集3』11 ページ
50, 「斎王国司印」唐時代	『篆刻全集3』16 ページ
51, 「静楽縣之印」唐時代	『篆刻全集3』15 ページ
52, 「東安縣印」唐時代	『篆刻全集3』17 ページ
53, 「憂縣印」唐時代	『篆刻全集3』16 ページ
54, 「彌彦山廟」濱村藏六(5世)作	『篆刻全集10』101 ページ
55, 「熊谷家印」河井荃廬作	『河井荃廬の篆刻』印譜一上 7 ページ
56, 「鈍鳥逆風」石井雙石作	『篆刻全集10』129 ページ
57, 「安比津」香取秀真作	『秋艸堂印譜』48 ページ
58, 「永平寺印」楠瀬日年作	『書道講座5』99 ページ
59, 「健」楠瀬日年作	『書道講座5』99 ページ
60, 「朔」曾田富康作	『秋艸堂印譜』94 ページ
61, 「朔」曾田富康作	『秋艸堂印譜』94 ページ
62, 「西光教院」内藤香石作	『書道講座6』57 ページ
63, 「法善寺印」小林斗盦作	『小林斗盦 篆刻の軌跡』69 ページ
64, 「鵜寺倉印」	東京書籍『書道I』107 ページ
65, 「法隆寺印」	東京書籍『書道II』54 ページ
66, 「静神宮印」	教育図書『書II』19 ページ
67, 「尊勝院印」	教育出版『書道II』16 ページ
68, 「鵜寺倉印」	光村図書『書II』69 ページ

参考文献

- ・『日本の古印』1965/5/1 木内武男編 二玄社
- ・『日本の官印』1974/11/20 木内武男著 東京美術
- ・『書道全集 別巻Ⅱ 印譜 日本付索引』1968/12/20 下中邦彦編 平凡社
- ・『書道講座 5 篆書・篆刻』1956/2/15 西川寧ら編 二玄社
- ・『書道講座 第6巻 篆刻』1973/2/10 西川寧編 二玄社
- ・『中田勇次郎著作集 第10巻』1987/4/20 中田勇次郎著 二玄社
- ・『はん』1964/3/10 石井良助著 學生社
- ・『印章』1966/5/20 荻野三七彦著 吉川弘文館
- ・『日本印章史の研究』2004/7/20 久米雅雄著 雄山閣
- ・『日本古代印文字典』1999/11/15 日紫喜誠編 アートダイジェスト
- ・『日本古代印集成』1996/3/29 国立歴史民俗博物館編 国立歴史民俗博物館
- ・『MUSEUM 東京国立博物館美術誌 No.149』1963/8 東京国立博物館
- ・『日本篆刻物語 はんこの文化史』2002/3/22 水野恵著 芸艸堂
- ・『書の日本史 第9巻 古文書入門/花押・印章総覧/総索引』1976/3/10 平凡社教育産業センター企画編集 平凡社
- ・『墨 85号 7月・8月号』1990/8/1 芸術新聞社
- ・『原色日本の美術 第22巻 書』1970/8/25 堀江知彦著 小学館
- ・『定本書道全集(別巻) 印譜編』1956/5/10 河出書房新社
- ・『篆刻全集 3 中国〈隋～清初〉』2001/11/30 小林斗盦編 二玄社
- ・『篆刻全集 10 日本』2002/1/15 小林斗盦編 二玄社
- ・『河井荃廬の篆刻』1978/5/15 西川寧著 二玄社
- ・『秋艸堂印譜』1979/12/15 宮川寅雄編 二玄社
- ・『小林斗盦 篆刻の軌跡』2016/11/1 東京国立博物館・謙慎書道会編 東京国立博物館・謙慎書道会
- ・『国史大系 第2巻 続日本紀』1966 黒板勝美・国史大系編集会編 吉川弘文館
- ・『国史大系 第26巻 延暦交替式・貞観交替式・延喜交替式・弘仁式・延喜式』1968/3/31 黒板勝美・国史大系編集会編 吉川弘文館
- ・『書道Ⅰ』2013/2/10 石飛博光ほか13名著 東京書籍
- ・『書道Ⅱ』2015/2/10 石飛博光ほか13名著 東京書籍
- ・『書道Ⅲ』2015/2/10 石飛博光ほか13名著 東京書籍
- ・『書Ⅰ』2015/2/5 關正人ほか15名著 教育図書
- ・『書Ⅱ』2014/2/5 關正人ほか15名著 教育図書
- ・『書Ⅲ』2015/2/5 關正人ほか15名著 教育図書
- ・『書道Ⅰ』2015/1/20 角井博ほか9名著 教育出版
- ・『書道Ⅱ』2015/1/20 角井博ほか9名著 教育出版

- ・『書道Ⅲ』2015/1/20 角井博ほか 9 名著 教育出版
- ・『書Ⅰ』2013/2/5 高木聖雨，宮澤正明ほか 14 名 光村図書出版
- ・『書Ⅱ』2015/2/5 高木聖雨，宮澤正明ほか 14 名 光村図書出版
- ・『書Ⅲ』2015/2/5 高木聖雨，宮澤正明ほか 14 名 光村図書出版